

（株）出雲空港カントリー倶楽部建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書

大倉 IV 遺跡
綿田原 I 遺跡

1 9 9 7

斐川町教育委員会

正 誤 表

訂 正 節 所	誤	正
P.24 本文19行目	183 は横歛である⑥。	183 は横歛である①。
P.25 本文14行目	出土しており、	出土しており⑥、

徳山雲空港カントリー倶楽部建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書

大倉IV遺跡・綿田原I遺跡

梯出雲空港カントリー倶楽部建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書

大倉 IV 遺跡
綿田原 I 遺跡

1 9 9 7

斐川町教育委員会

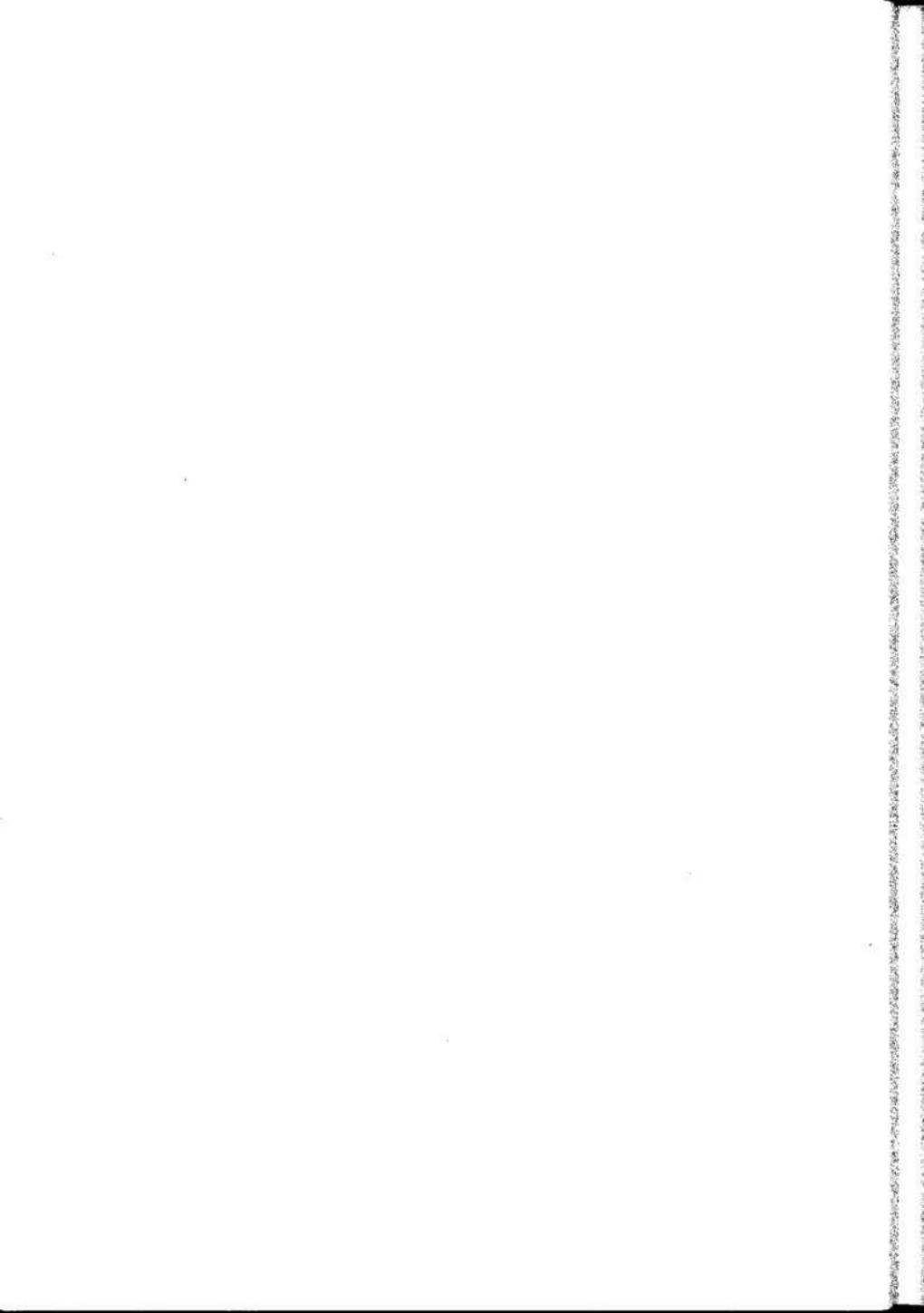
序 文

島根県の宍道湖南西岸に所在いたします斐川町では、島根県の玄関口ともなる山雲空港を抱え、企業誘致に伴う工業団地の造成や流通の効率化をはかるための道路の新設・改良が急激に進んでおり、また、東部の丘陵地帯では、ゴルフ場建設や、ヘルシータウン計画などのリゾート開発も同時に進められております。 その一方で先人の残してくれた貴重な文化遺産が確実に破壊される危機に瀕しているのも事実であります。 開発に伴い、埋蔵文化財の発掘調査件数も比例して増加しておりますが、私たちは、このような文財を守り、後世に伝えていかなければなりません。 この発掘調査によって得られる「先人の足跡」を皆様にご理解いただき、私たちのまち斐川町の過去の姿に思いをはせていただければ、幸いと存じます。 末筆ではございますが、この調査にご指導・ご協力を頂きました皆様に対して、厚く御礼申し上げますとともに、今後とも文化財行政にお一層のご協力とご理解を賜りますようお願い申し上げます。

平成9年3月

斐川町教育委員会

教育長 杉 谷 光 昭



例　　言

1. 本書は、備山雲空港カントリー倶楽部より委託を受けて平成5年度～平成7年度に実施した出雲空港カントリー倶楽部建設予定地内の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2. 調査組織は下記のとおり。

調査主体	斐川町教育委員会
事務局	富岡俊夫（斐川町教育委員会文化課 課長）・山根信夫（同 係長 平成5年度）・錦織 勉（同 係長 平成6・7年度）・呂子裕江（同 係長 平成7年度）・梅 由喜子（同 職員）
調査員	四方田三己（斐川町教育委員会文化課 主事）・松本堅吾（同 主事 平成6・7年度）・川吉謙二（同 嘱託 平成5・6年度）・松下智義（同）
遺物整理	錦田充子（斐川町教育委員会文化課 嘱託 平成8年度）・内田久美子（同 職員）・青木由美（同）・大田晴美（同）

3. 調査の実施にあたっては、穴道作弘・陰山真樹（以上 斐川町教育委員会 文化課）・常松幹夫（同 生涯学習課）・渡部 学・眞田裕司（以上 出雲空港カントリー倶楽部）・瀬川 守・南田秀二（以上 サイト・コーポレーション）・田島夕美子・高雄由起子・徳本 悟・中本八穂・木瀬智晴・元持新一（以上 奈良大学学生）・飯塚 清・飯塚堅志・飯塚定大・飯塚トシエ・飯塚 畏・飯野早苗・池淵利子・伊藤トヨ子・江角栄二・遠藤繁雄・岡 喜儀・岡田康江・小村正良・陰山乙造・梶谷松代・加藤秋子・北脇栄子・米間安治・黒田幸一・黒田哲子・黒田友喜・黒田瑞夫・佐田尾耕逸・佐藤倭和子・鷲田智子・昌子田鶴子・呂子都子・呂子安正・呂子芳夫・須田チエ子・高木長一・高木八重子・高橋重雄・月坂雄一・新田栄美子・野津人吉・長谷川恒太郎・原 定雄・原 義延・樋野行雄・樋野ゆう子・樋野喜久・古川定夫・村上シゲリ・村上花子・村上光恵・持田邦雄・持田繁義・矢野忠雄・山田ヒサ子・山根作夫・山根百合子諸氏らの協力を得た。

また、河瀬正利氏（広島大学文学部助教授）・広江耕司氏（鳥取県教育委員会 文化課）・錦田剛氏（同 文化財課）・伊藤瑞章氏（斐川歓業株式会社）からも有益な助言・協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。

4. 調査の際には、備山雲空港カントリー倶楽部、備大成建設、備フクダ、備淡神文化財团から多大な協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。

5. 出土木製品の樹種鑑定は、備元興寺文化財研究所保存科学センターに依頼し、協力を得た。

6. 遺物実測は四方田、錦田、青木が、トレースは松木がそれぞれ行なった。

7. 本書の執筆は四方田、松本、川吉が行なった。執筆の分担は目次に記した。

8. 本書の編集は四方田、松本が行なった。

凡 例

1. 図中の方位は基本的に磁北をあらわしている。ただし、挿図第1・2・3図と図版1・2は座標北を表している。
2. 本文および図版中の示したレベル高は、すべてT.P.+値(m)であるがT.P.+は省略している。
3. 遺物番号は挿図と写真図版で統一している。
4. 第2表 文化財一覧表と図版1の番号は一致させた。
5. 遺構の名称は、下記のとおりアルファベットの組み合わせによって表示しているが、一部適當な呼称の見当たらないものは、そのまま日本語の名称によって呼称している遺構もある。また、遺構番号は2桁を原則として、1桁の数字の前には0を付している。

SB 建物 SD 溝 SK 土坑 Pit 柱穴 SX 性格不明遺構

6. 本書で使用した土壤色は、小山正忠・竹原秀夫編著『新版標準土色帖』1988を用いて命名しているが、本文中は色相・明度・彩度の数値を省略している。
7. 遺物実測図版では、断面の表示を便宜上、弥生土器・土師器—白抜き、須恵器—黒塗りのように塗り分けた(弥生土器・土師器が同じ表示であることに、大意はない)。

目 次

序 文

例 言

凡 例

目 次

第1章 調査に至る経緯	(四方田)	1
第2章 位置と環境	(四方田)	2
第3章 大倉IV遺跡の調査	4	
第1節 I区の調査	(四方田)	4
第2節 II区の調査	(川吉)	16
第3節 III区の調査	(四方田)	17
第4節 IV区の調査	(松本)	19
第5節 大倉IV遺跡出土の銅錢	(四方田)	25
第4章 織田原I遺跡の調査	29	
第1節 I区の調査	(川吉)	29
第5章 まとめ	(四方田)	31
報告書抄録	卷末	

挿 図 目 次

第1図	大倉IV遺跡・綿田原I遺跡調査区位置図	3
第2図	大倉IV遺跡I区SB 04・06・09・08平面図・断面図	5
第3図	大倉IV遺跡I区SB 10・12・13・16平面図・断面図	6
第4図	大倉IV遺跡I区出土の石製品	8
第5図	大倉IV遺跡I区出土の鉄製品	8
第6図	大倉IV遺跡II区出土の土器	16
第7図	大倉IV遺跡IV区出土の土製品	23
第8図	大倉IV遺跡IV区出土の鉄製品	24
第9図	大倉IV遺跡出土の銅錢	28
第10図	綿田原I遺跡I区出土の土器	30

表 目 次

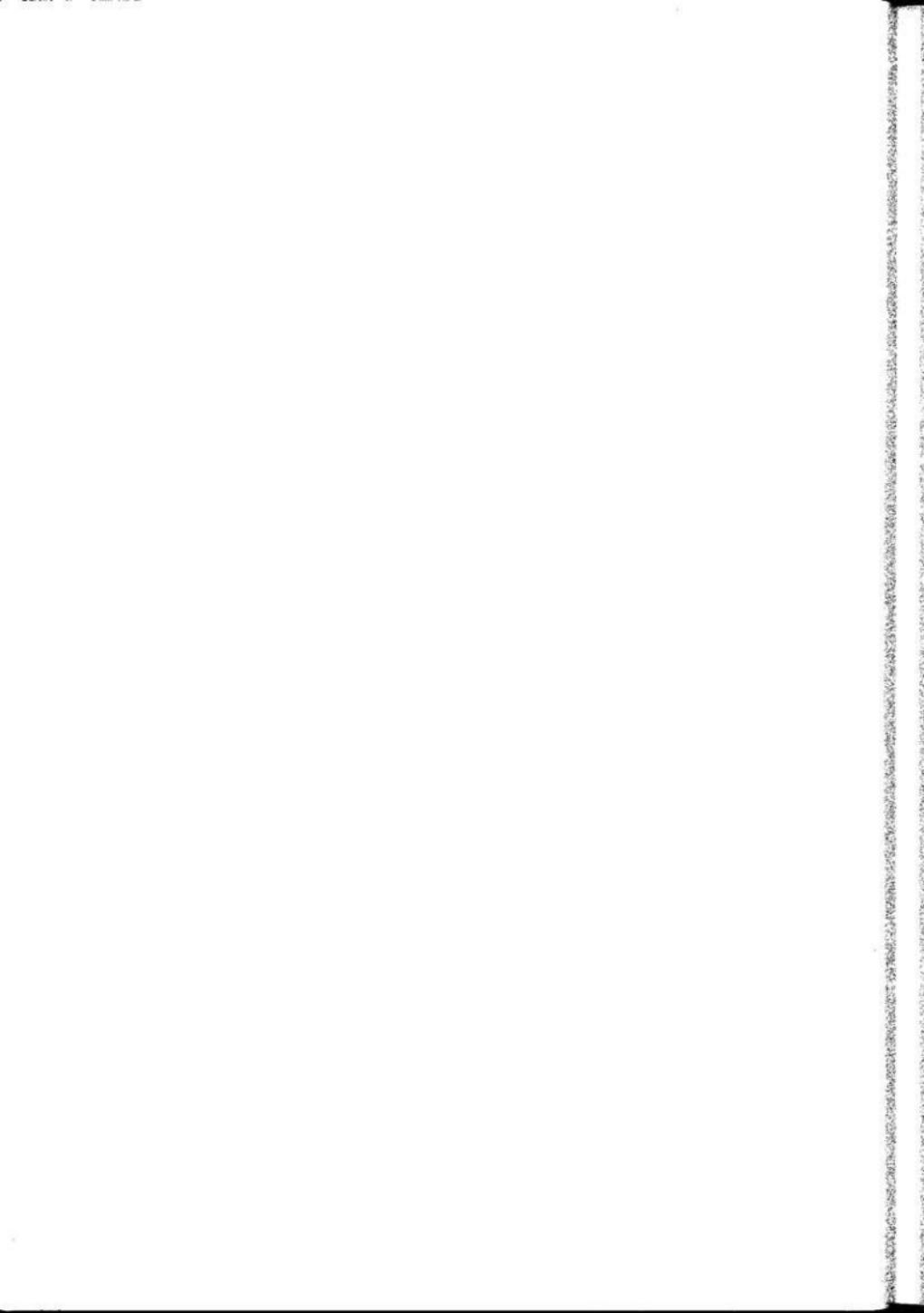
第1表	大倉IV遺跡I区出土土器観察表	10
第2表	文化財一覧表	32

図 版 目 次

図版1	斐川町の文化財
図版2	大倉IV遺跡I区平面図
図版3	大倉IV遺跡I区SB 01平面図・断面図
図版4	大倉IV遺跡II区平面図
図版5	大倉IV遺跡III区A地区平面図
図版6	大倉IV遺跡III区B地区平面図
図版7	大倉IV遺跡IV区平面図
図版8	大倉IV遺跡IV区断面図
図版9	大倉IV遺跡IV区谷地形断面図
図版10	綿田原I遺跡I区平面図
図版11	大倉IV遺跡I区山上の土器①

- 図版12 大倉IV遺跡 I 区出土の上器②
- 図版13 大倉IV遺跡 I 区出土の上器③
- 図版14 大倉IV遺跡 I 区出土の土器④
- 図版15 大倉IV遺跡 I 区出土の上製品・石製品
- 図版16 大倉IV遺跡 I 区出土の木製品
- 図版17 大倉IV遺跡 II 区出土の鉄製品
- 図版18 大倉IV遺跡 III 区出土の土器①
- 図版19 大倉IV遺跡 III 区出土の土器②
- 図版20 大倉IV遺跡 IV 区出土の土器①
- 図版21 大倉IV遺跡 IV 区出土の上器②
- 図版22 大倉IV遺跡 IV 区出土の上器③
- 図版23 大倉IV遺跡 IV 区出土の土器④
- 図版24 大倉IV遺跡 IV 区出土の土器⑤
- 図版25 大倉IV遺跡 IV 区出土の木製品①
- 図版26 大倉IV遺跡 IV 区出土の木製品②
- 図版27 大倉IV遺跡 IV 区出土の木製品③
- 図版28 大倉IV遺跡 IV 区出土の木製品④
- 図版29 大倉IV遺跡 IV 区出土の木製品⑤
- 図版30 大倉IV遺跡 I 区
- 図版31 大倉IV遺跡 I 区 SB 01・大倉IV遺跡 II 区
- 図版32 大倉IV遺跡 III 区 A 地区・B 地区
- 図版33 大倉IV遺跡 IV 区①
- 図版34 大倉IV遺跡 IV 区②
- 図版35 細田原 I 遺跡 I 区①
- 図版36 細田原 I 遺跡 I 区②
- 図版37 大倉IV遺跡 I 区出土の土器①
- 図版38 大倉IV遺跡 I 区出土の土器②
- 図版39 大倉IV遺跡 I 区出土の土器③
- 図版40 大倉IV遺跡 I 区出土の土器④
- 図版41 大倉IV遺跡 I 区出土の土器⑤
- 図版42 大倉IV遺跡 I 区出土の土器⑥
- 図版43 大倉IV遺跡 I 区出土の土器⑦
- 図版44 大倉IV遺跡 I 区出土の土器⑧
- 図版45 大倉IV遺跡 I 区出土の土器⑨
- 図版46 大倉IV遺跡 I 区出土の土器⑩
- 図版47 大倉IV遺跡 I 区出土の土製品・石製品・鉄製品

- 図版48 大倉IV遺跡I区出土の木製品
- 図版49 大倉IV遺跡II区出土の上器・鉄製品
- 図版50 大倉IV遺跡III区出土の上器①
- 図版51 大倉IV遺跡III区出土の土器②
- 図版52 大倉IV遺跡IV区出土の土器①
- 図版53 大倉IV遺跡IV区出土の土器②
- 図版54 大倉IV遺跡IV区出土の土器③
- 図版55 大倉IV遺跡IV区出土の土器④・土製品
- 図版56 大倉IV遺跡IV区出土の鉄製品・木製品①
- 図版57 大倉IV遺跡IV区出土の木製品②
- 図版58 大倉IV遺跡IV区出土の木製品③
- 図版59 綿田原I遺跡I区出土の上器



第1章 調査に至る経緯

島根県簸川郡斐川町では、町東部の低丘陵地帯にゴルフ場やヘルシータウン計画などのリゾート開発が急激に進められつつある。

平成3年に斐川町学頭、神庭地区でゴルフ場建設が計画され、事業主である㈱三栄開発より、斐川町教育委員会あてに分布調査の依頼があった。これを受け、斐川町教育委員会ではコース予定地内の分布調査を実施した。その結果、遺跡の存在が確認され、事業主の㈱三栄開発には、遺跡として認められた箇所については可能な限り、工事箇所より除外し、やむを得ない場合については、事業実施前に発掘調査を実施すること。遺跡の存在する可能性が高い箇所については、試掘調査を実施して遺跡が確認された場合は発掘調査を実施するという2点の回答を出した。

この回答をうけて、ゴルフ場の計画面積を縮小した事業上との再度の協議がなされたが、最終的にゴルフ場建設計画は白紙に撤回された。

平成4年、斐川町と地元企業が出資して第3セクターの㈱山雲空港カントリー倶楽部が設立され、ゴルフ場建設計画を踏襲した。これによって、㈱山雲空港カントリー倶楽部から島根県知事に開発協議書が提出され、島根県教育委員会教育長から斐川町教育委員会教育長あてに、「開発協議に係る事業と埋蔵文化財保護との調整について」の通知があった。この通知を受けて、斐川町教育委員会では平成5年12月より試掘調査を実施することとした。

大倉IV遺跡については平成2年の1月から3月にかけて、範囲確認の調査が実施されており、溝状遺構や古墳時代前期から奈良時代末期頃までの土器、碧玉、砥石、叩石などの石製品が確認されたために、集落の存在が予想されていた。

これらの成果をふまえ、試掘調査は、全体で210ヵ所のトレンチを設定し、発掘調査必要箇所の絞り込みを行なった。この結果、大倉IV遺跡では古墳時代から現代までの遺物と古墳時代から奈良・平安時代頃の遺構面を確認することができた。また、綿田原I遺跡でも古墳時代の遺物と遺構面が認められたために、この両遺跡の重点的な発掘調査が必要であるとの結論に至った。この結果をうけて、㈱山雲空港カントリー倶楽部と斐川町教育委員会との間で協議し、平成6年4月より本調査を開始した。調査は平成7年11月に終了し、平成8年度は報告書作成のための整理作業が行なわれ、本書の刊行に至っている。

第2章 位置と環境（図版1）

斐川町は、島根県東部の宍道湖西岸に位置し、西から北にかけては、第1級河川の斐伊川によって境を成し、南側は標高366mの仏経山を中心とする山地によって仕切られている。面積の約50%は、斐伊川によって形成された沖積地で北側に展開する。残りの約50%は、山地を含め、山地から派生する低丘陵によって構成されている。

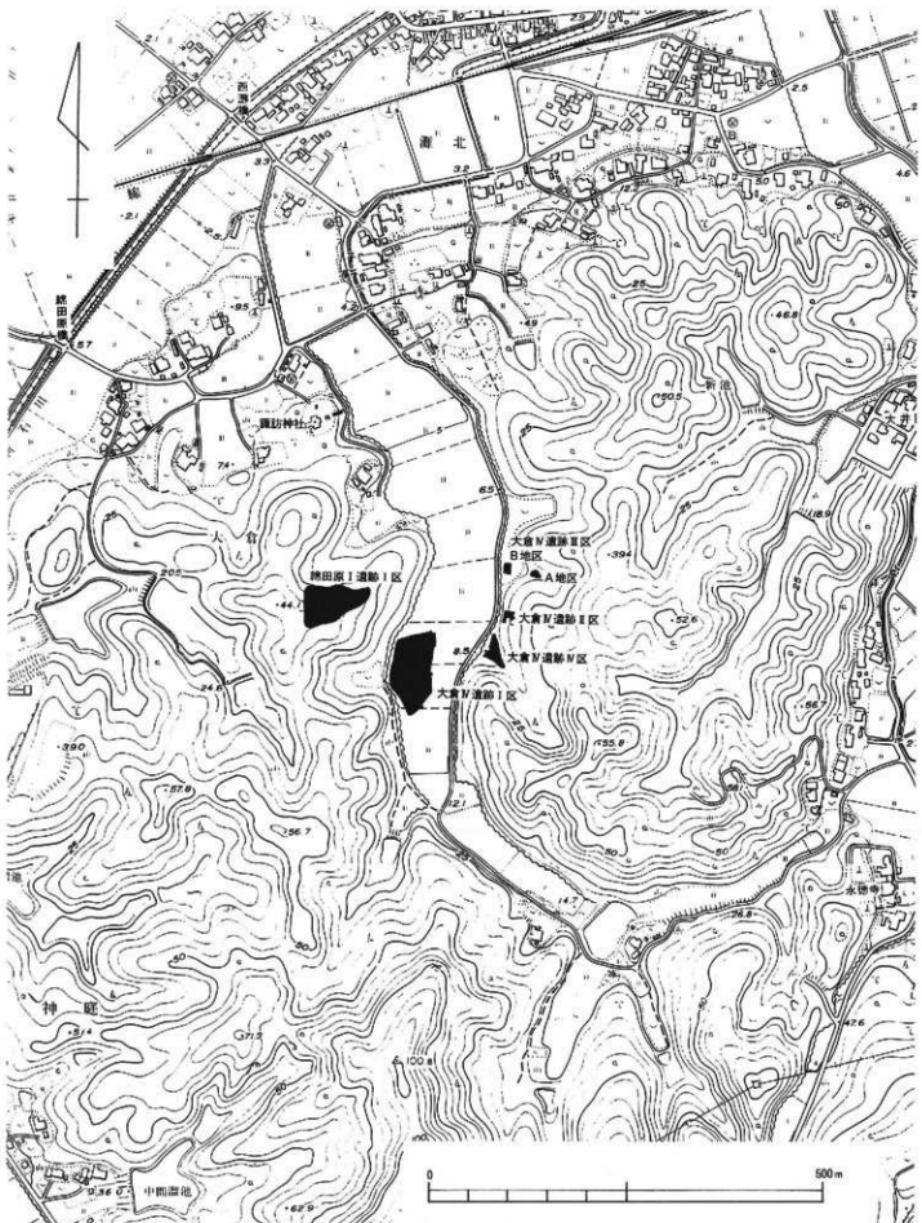
遺跡の分布でみると、斐伊川河川を含めた北半部の沖積地で確認された遺跡は、斐伊川の鉄橋かけかえの際に発見された斐伊川鉄橋遺跡などごくわずかであり、遺跡のほぼ全部が、南半部の低丘陵から山地にかけて存在していると言ってよいほどである。

今回の調査地は、この南側の丘陵地帯の東部である。人黒山（315m）から北方向に低丘陵が派生し、簸川平野に向かってのびている。この低丘陵を簸川南部大型農道が南北に分断する形になっているが、ゴルフ場建設に伴う造成範囲は、簸川南部大型農道より北側で、東西が標高40～50mの低丘陵に囲まれた一帯である。

調査区周辺の主要な遺跡をみると、北西1kmのところに町内最大の円墳である小丸子山古墳（径32m）や1.7km北には古墳時代中期のものとしては、山雲平野最大の前方後円墳で、鳥根県指定文化財の神庭岩船山古墳（現在の全長は一部が削られ48mであるが、もともとは60m程度あったと思われる。）がある。また北東2kmのところには、現状では円墳であるが、前方後円墳であった可能性が強い軍原古墳（径30m）などの中期の古墳が存在している。

さらに、約4km西には、銅劍358本、銅鐸6個、銅矛16本が出土した神庭荒神谷遺跡があり、南約2kmには、中世に出雲で勢力をもっていた尼子氏の家臣で尼子十旗の一つである米原氏の居城であった高瀬城がある。

このように、調査地周辺は、太古からかなりひらかれた土地であったものと考えられる。



第1図 大倉IV遺跡・織田原I遺跡調査区位置図

第3章 大倉IV遺跡の調査

第1節 I区の調査（第1図）

当該調査区は、大黒山から北に派生する丘陵先端に挟まれた幅100m程度の谷に位置し、標高が約8mで、現況は水田である。

層位的には、谷ということもあり西から東への傾き、いいかえれば、自然流路に向けての傾斜が認められた。地山には場所によって異なるが、概ね、地表下80~150cmまでのところで黄褐色の粘質土が露呈する。この地山直上に層厚20~30cmを測る暗灰褐色の遺物包含層が確認された。

遺構（図版2・3・30・31、第2・3図）

遺構検出は地表面で行ない、堅穴住居、掘立柱建物、溝状遺構、性格不明遺構、自然流路などを確認した。

SB 01は堅穴住居である。壁体は20cm程度、周溝壁は幅20~30cm、深さ約10cmを測り、床面の10ヵ所でピットが検出された。また、埋土中から古墳時代前期頃に位置づけされる遺物が出土した。

SB 02は桁行4間（7.2m）、梁行2間（4.0m）で、柱間は桁行1.8~1.9m、梁行2.0mを測り、面積は30.4m²である。柱筋はほぼN-18°-Eを示す。

SB 03は桁行3間（7.0m）、梁行3間（5.6m）で、柱間は桁行2.2~2.4m、梁行1.4~2.0mを測り、面積は39.2m²である。柱筋はほぼN-17°-Eを示す。

SB 04は総柱建物である。桁行3間（6.4m）、梁行2間（5.2m）で、柱間は桁行2.0~2.2m、梁行2.6m、面積は33.28m²である。柱筋はほぼN-20°-Eを示す。

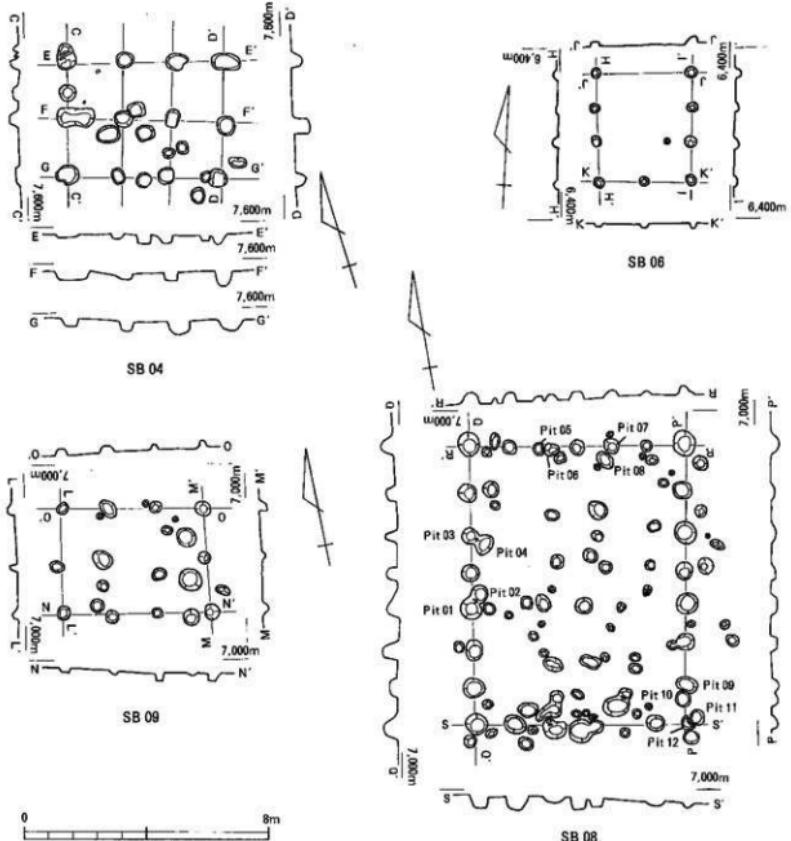
SB 05は桁行3間（8.0m）、梁行3間（6.8m）で、柱間は桁行2.6~2.8m、梁行2.0~2.6m、面積は55.4m²である。柱筋はほぼN-22°-Wを示す。

SB 06は桁行3間（3.6m）、梁行2間（3.2m）で、柱間は桁行1.2m、梁行1.6m、面積は11.52m²である。柱筋はほぼN-5°-Wを示す。

SB 07はSD 02によってピットが切られているために桁行は4間以上としかわからないが、梁行2間（4.2m）で、柱間は桁行1.6~2.1m、梁行1.7~2.1mである。柱筋はほぼN-13°-Wを示す。

SB 08は桁行7間（9.2m）、梁行6間（6.8m）で、柱間は桁行1.7~2.1m、梁行0.8~1.3m、柱筋はほぼN-8°-Wを示し、面積が62.56m²と今回の調査で確認された建物のなかで、最も大きいものである。柱間は他の建物よりも狭いが、ピットの規模は大きく、かなりしっかりとしたものであるため、人型の立派な建物であったと思われる。また、南側に庇がつき、この庇を含めて8間になる可能性もあるが、8間目の柱筋は安定した状態で確認されていないゆえに、ここでは桁行7間にとどめておく。

SB 09は桁行3間（4.8m）、梁行2間（3.2m）で、柱間は桁行、梁行ともに、1.6mで面積は15.36m²を測る。柱筋はほぼN-9°-Eを示す。



第2図 大倉N遺跡I区 SB 04・06・09・08平面図・断面図

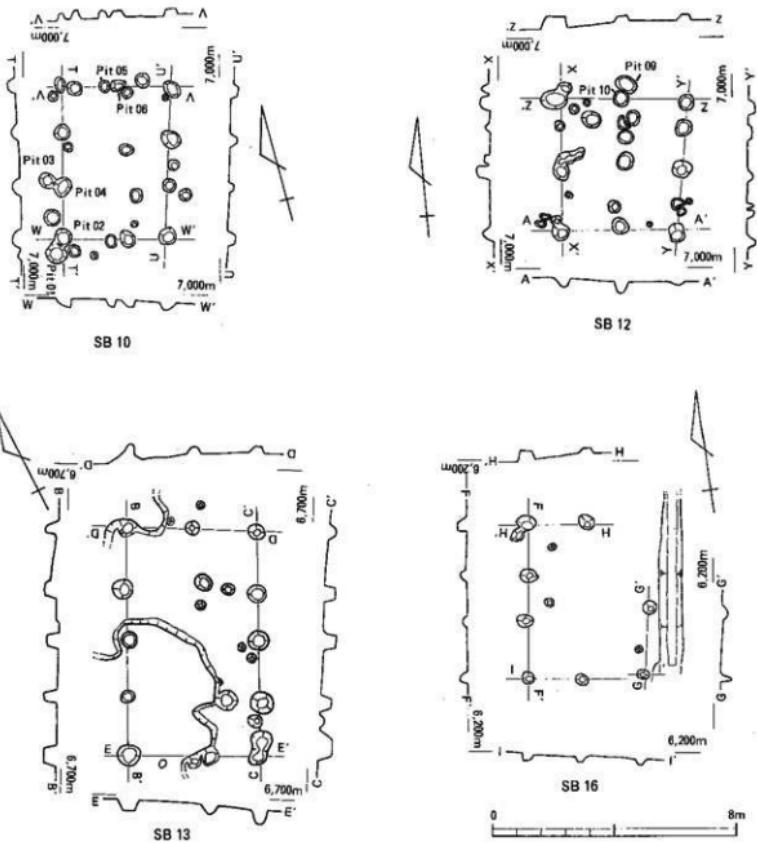
SB 10は桁行3間(4.2m)、梁行2間(3.2m)で、柱間は桁行1.6~1.7m、梁行1.7mで面積は16.66m²である。柱筋はほぼN-17°-Eを示す。

SB 11は桁行3間(4.8m)、梁行2間(3.2m)で、柱間は桁行1.5~1.6m、梁行1.6mで面積は15.36m²である。柱筋はほぼN-14°-Eを示す。

SB 12は桁行2間(4.2m)、梁行2間(3.9m)で、柱間は桁行2.1m、梁行1.95mで面積は16.38m²である。柱筋はほぼN-5°-Eを示す。

SB 13は桁行4間(7.4m)、梁行2間(4.4m)で、柱間は桁行1.8~2.0m、梁行2.2m、面積は32.56m²である。柱筋はほぼN-25°-Eを示す。

SB 14は総柱建物である。桁行2間(3.6m)、梁行2間(2.4m)で、柱間は桁行1.8m、梁行1.2m、



第3図 大倉N遺跡 I区 SB 10・12・13・16平面図・断面図

面積は8.46m²である。柱筋はほぼN-27°-Eを示す。

SB 15もSB 14と同様に総柱建物である。桁行2間(3.2m)、梁行2間(3.0m)で、柱間は桁行1.6m、梁行1.5m、面積は9.6m²である。柱筋はほぼN-27°-Eを示す。

SB 16は桁行3間(5.1m)、梁行2間(3.8m)で、柱間は桁行1.6~2.1m、梁行1.7~2.1mで面積は19.38m²を測る。柱筋はほぼN-7°-Eを示す。

掘立柱建物個々の時期については判断し難いが、SB 08~SB 12の前後関係はPit 01~Pit 12の切り合いにより、古い方からSB 09-SB 10-SB 08-SB 11・SB 12の順であると思われる。SB 11とSB 12の新旧は互いの切り合い関係がないために、残念ながら判断できない。

自然流路は調査区東端で南から北に向かって検出された。幅、深さともに調査区外にのびるために確

認できなかった。埋土中より土器、土製品、木製品などの遺物が多数出土した。

SD 01は調査区やや南寄りで検出された。長さ12.8m、最大幅2m、深さは40~60cmを測り、東方にのびている。

SD 02は長さが13.2m、最大幅3m、最深部の深さは80cmを測る。また、SD 02はSD 01のつづきと考えられる。

SD 03は最大幅3.4m、深さは約80cmで調査区西側から北に向かってのび、断面は、ほぼ「V」状である。埋土上層から奈良・平安期に、埋土下層からは古墳時代後期に位置づけされる土器がそれぞれ出土した。

SD 04は最大幅2m、深さがは60cmで、SD 03から分岐し、東に向かって展開する。断面は、場所によって異なるが、「V」字あるいは「U」字状を呈する。埋土下層より、奈良・平安期に位置づけされる土器を検出した。

SD 05は調査区中央部で検出され、細切れではあるが、SD 04と同様に、SD 03から枝分かれしたものと思われる。最大幅は1.4m、深さは約40cmを測る。

SD 06は、調査区南側で検出された浅い溝である。長さが4.6m、最大幅約40cm、深さは10cm~15cmである。

SD 01、SD 02、SD 04、SD 05どれも東西方向にのび、自然流路に流れ込むものと思われる。SD 03は唯一、調査区では自然流路に平行した形を呈しているが、調査区の北側で、自然流路は西方向に流れることが確認されているので、SD 03も他のものと同様に自然流路へ注ぐものと考えられる。

SK 01は、長径1.6m、短径1.2mのはぼ楕円形を呈し、最深部の深さは約60cmを測る。埋土中より黒曜石製の石鏃が1点出土した。

SX 01は深さ約70cm、SX 02は深さが約1.3mで、ともに自然流路のカタから落ち込む造構で、埋土中より遺物が多数出土した。

遺物（図版11~16・37~48、第4・5図、第1表）

出土遺物は時期的に、古墳時代~奈良・平安時代頃のものが主体である。1は弥生土器であるが、自然流路埋土より出土したため、恐らくは流れ込んだものと思われる。

内容的には甕、壺、高杯、器台などの土師器、蓋、杯、高杯、壺、甕などの須恵器や土師質土器などの土器を中心として、十鉢、馬形土製品などの土製品、紡錘車、石鏃などの石製品、鉄針などの鉄製品、火鑽臼、下駄などの木製品が確認された。

個々の土器についての詳細は第1表にゆずる。

96~103は土鍤である。このうち96~99は棒状の土鍤で、すべてSX 02より出土した。

96は全長が6.1cm、最大径は2cm、孔径は5mmを測る。断面は楕円形で色調は褐色を呈する。

97は全長6.4cm、最大径は2.3cm、孔径4mmを測る。断面はほぼ楕円形で、色調は褐色を呈する。

98は一部欠損しているので全長は不明であるが、最大径は2cm、孔径は5mmを測る。断面は楕円形で色調は褐色を呈する。

99は全長が7.0cm、最大径は2cm、孔径は4mmを測る。断面はほぼ橢円形で色調は褐色を呈する。

100は筒状の土錐である。全長が3.5cm、最大径は3.5cm、孔径は1.2cmを測る。断面は円形で、淡褐色を呈する。遺物包含層より出土した。

101は球状の土錐である。全長が3.3cm、最大径は3.4cm、孔径は8mmを測る。断面はほぼ円形で淡褐色を呈する。SX 02より出土した。

102も球状の土錐である。全長が3.0cm、最大径は2.5cm、孔径は8mmを測る。断面はほぼ円形で褐色を呈する。SD 01より出土した。

103は筒状の土錐である。全長が3.1cm、最大径3.1cm、孔径8mmを測る。断面は円形で、色調は黒褐色を呈する。自然流路埋土上層より出土した。

104は馬形土製品である。厚さ5~7mmの板状で輪郭のみにて馬の形を表現している。焼成は良好で、浅黄橙色を呈している。胎土は直径1mm以下の砂粒を比較的多く含む。SX 02埋土上層より出土した。

105は鋤頭車である。最大径は5cm、全長が2.0cm、孔径は6cmを測る。断面は台形状で、色調は黄白色を呈する。使用石材は、凝灰岩である。

106・107は凹基式の石鐵である。

106はU型製で、基辺の凹みは浅く2mmを測る。側辺は基部に向かって直線的にのび、断面は菱形を呈する。全長は2.9cm、基部径2.3cm、最大厚5mm、重量2.1gを測る。SB 01壁溝内より出土した。

107は黒曜石製で、基辺の凹みが5~6mmと比較的大きなものである。側辺は基部に向かって直線的にのび、断面は菱形を呈する。全長は3.0cm、基部径1.9cm、最大厚4mm、重量1.45gを測る。SK 01より出土した。

108は鉄製の針である。全長7.7cm、重量は7.2gで断面は方形を呈する。頭部は最大幅1cmで平坦を成し、中心部には孔があるものと思われるが、銹化によって塞がれている。遺物包含層より出土した。

109~112は木製品で、109~111は火鑽臼である。

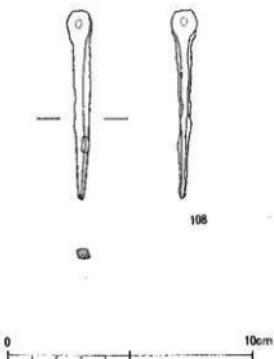
109は全長23cm、最大幅は4cm、厚さは2.4cmを測り、直径1.4cmの火鑽穴を三つもつ。断面は方形を呈し、材質はスギである。自然流路埋土上より出土した。

110は全長27cm、最大幅は4cm、厚さは2.4cmを測り、直径1.2cm前後の火鑽穴を八つもつ。断面は方形を呈し、材質はスギである。SX 02最下層より出土した。

111は全長29cm、最大幅は3.8cm、最大厚1.8cmを測り、直径0.8~1cmの火鑽穴を二つもつ。断面は椭



第4図 大倉N遺跡I区出土の石製品



第5図 大倉N遺跡I区出土の鉄製品

円形を呈し、何かの柄を転用したものと思われる。材質はヒノキで、SX 02最下層より出土した。

112は田下駄である。かなり小型で使用目的から考えると、田下駄ではない可能性もあるが、歴がないことから、ここでは田下駄として扱う。長径が23.4cm、短径10.2cm、最大厚は1.8cmを測る。穴には繊維が残存しており、底部の磨滅状態から右足のものと思われる。材質はスギで、SX 02最下層より出土した。

第1表 大倉N遺跡I区出土土器観察表

番号	捕回 又は 図版 番号	種類	器種	法量 (cm)	出土層位 又は遺構	調 査	焼成・胎土・色調
1	図版II	弥生土器	甕	口径13.3 器高28.7	自然流路 埋土	外面：タテ方向のハケ調整、一部磨き 内面：下から上へのタテ方向にケズリの 後にナデ	焼成：良好 色調：にぶい黄橙色 胎土：1～2mm程度の砂粒を多量に含む。
2	図版II	土師器	盃	口径20.0	S D 0 1 埋土	磨滅により不明	焼成：普通 色調：浅黄橙色 胎土：2mm以下の砂粒を比較的多く含む。
3	図版II	土師器	盃	口径24.6	S D 0 3-3 埋土中層	磨滅により不明	焼成：普通 色調：浅黄橙色 胎土：2mm以下の砂粒を比較的多く含み、中には4mm程度のものを含む。
4	図版II	土師器	盃	口径11.4	S D 0 4-3 埋土	磨滅により不明	焼成：やや不良 色調：黄灰白色 胎土：1.5mm以下の砂粒を多く含む。
5	図版II	土師器	盃	口径11.2	S D 0 1 埋土上層	磨滅により不明	焼成：普通 色調：浅黄橙色 胎土：2mm以下の砂粒を多量に含む。
6	図版II	土師器	甕	口径18.2	自然流路 埋土	外面：ナデ 内面：ナデ	焼成：良好 色調：浅黄橙色 胎土：2mm以下の砂粒を多量に含む。
7	図版II	土師器	甕	口径13.8	S D 0 3-3 埋土中層	磨滅により不明	焼成：やや不良 色調：浅黄橙色 胎土：2mm以下の砂粒を多量に含む。
8	図版II	土師器	甕	口径15.8	自然流路 埋土	磨滅により不明	焼成：やや不良 色調：浅黄橙色 胎土：2mm以下の砂粒を多量に含む。
9	図版II	土師器	甕	口径17.8	S D 0 3-3 埋土上層	磨滅により不明	焼成：普通 色調：黄橙色 胎土：2mm以下の砂粒を比較的多く含み、中には3mm程度のものを含む。
10	図版II	土師器	甕	口径21.4	S D 0 3-3 埋土中層	口縁部：ヨコナデ 外面：ヨコナデ 内面：頸部以下は横方向のヘラケズリ	焼成：良好 色調：浅黄橙色 胎土：1mm以下の砂粒を比較的多く含む。
11	図版II	土師器	甕	口径15.2	S D 0 3-3 埋土下層	口縁部：ヨコナデ 外面：ヨコナデ 内面：頸部以下は横方向のヘラケズリ	焼成：良好 色調：浅黄橙色 胎土：1mm以下の砂粒を多く含む。
12	図版II	土師器	甕	口径22.0	S D 0 3-3 埋土上層	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	焼成：普通 色調：外：浅黄橙色 内：灰白色 胎土：2mm以下の砂粒を比較的多く含む。
13	図版II	土師器	甕	口径14.8	S D 0 3-3 埋土下層	口縁部：ヨコナデ 外面：ヨコナデ 内面：頸部以下は横方向のヘラケズリ	焼成：やや不良 色調：外：浅黄橙色 内：淡黄色 胎土：1.5mm以下の砂粒を多く含む。
14	図版II	土師器	甕	口径14.9	S X 0 2 埋土	口縁部：ヨコナデ 外面：ヨコナデ 内面：頸部以下は横方向のヘラケズリ	焼成：普通 色調：黄灰白色 胎土：1～2mm程度の砂粒を多量に含む。
15	図版II	土師器	甕	口径15.1 器高 8.4	S B 0 1 埋土上層	外面：ハケ調整 内面：ハケ調整か？	焼成：良好 色調：内：橙色 外：褐色 胎土：密
16	図版II	土師器	甕	口径30.0	自然流路 埋土	口縁部：ヨコナデ 外面：縦方向のハケ調整 内面：頸部以下ヘラケズリの後にナデ	焼成：良好 色調：にぶい黄橙色 胎土：2～4mmの砂粒を多量に含む。
17	図版II	土師器	甕	口径15.4	S D 0 6 埋土下層	口縁部：ヨコナデ 外面：ハケ調整 内面：頸部以下ヘラケズリの後にナデ	焼成：良好 色調：浅黄橙色 胎土：密
18	図版II	土師器	盃	口径10.4	S B 0 1 埋土	口縁部：ナデか？ 外面：ナデか？ 内面：頸部以下ヘラケズリの後にナデ	焼成：やや不良 色調：浅黄橙色 胎土：2～5mmの砂粒を多量に含む。

第1表 大倉N遺跡I区出土土器観察表

番号	種類 又は 器形 番号	種類	器種	法量 (cm)	出土層位 又は遺構	調 整	焼成・胎土・色調
19	図版11	土師器	甕 か?	口径13.8	S X 0 2 埋土	口縁部: ヨコナデ 外面: 縦方向のハケ調整 内面: 横方向のヘラケズリ	焼成: 良好 色調: にぶい黄褐色 胎土: 1.5mm前後の砂粒を多量に含む。
20	図版12	土師器	甕	口径18.0	自然流路 埋土	口縁部: ヨコナデ 外面: ヨコナデ 内面: 頸部以下横方向のヘラケズリ	焼成: 普通 色調: 淡赤橙色 胎土: 2mm以下の砂粒を多量に含む。
21	図版12	土師器	甕	口径29.4	S X 0 1 埋土	磨滅により不明	焼成: やや不良 色調: 浅黄褐色 胎土: 2mm以下の砂粒を多量に含む。
22	図版12	土師器	甕	口径13.2	S B 0 1 埋土	口縁部: ヨコナデ 外面: ナデ? 内面: 横方向のヘラケズリの後にナデ?	焼成: 良好 色調: 外 浅褐色 内 灰色っぽい黒色 胎土: 1.5mm以下の 砂粒をやや多く含む。
23	図版12	土師器	甕	口径17.3	自然流路 埋土	口縁部: ヨコナデ 外面: ナデ? 内面: 頸部以下ヘラケズリ	焼成: 普通 色調: 外 橙色 内 にぶい褐色 胎土: 1~2mmの砂粒を多 量に含む。
24	図版12	土師器	甕	口径24.0	自然流路 埋土上層	口縁部: ヨコナデ 外面: ナデ? 内面: 頸部以下横方向のヘラケズリ	焼成: 良好 色調: 外 にぶい黄褐色 内 浅黄褐色 胎土: 2mm前後の砂粒 を多量に含む。
25	図版12	土師器	甕	口径13.8	自然流路 埋土	口縁部: ヨコナデ 外面: ナデ? 内面: 横方向のヘラケズリ	焼成: 良好 色調: 浅黄褐色 胎土: 1~2mmの砂粒を多量に含む。
26	図版12	土師器	甕	口径19.0	S X 0 2 埋土	口縁部: ヨコナデ 外面: ヨコナデ、一部、縦方向のハケ調整 内面: 横方向のヘラケズリ	焼成: 普通 色調: 黄色っぽい灰色 胎土: 1~2mmの砂粒を多量に含む。
27	図版12	土師器	甕	口径20.2	S X 0 2 埋土	口縁部: ヨコナデ 外面: ヨコナデ 内面: 頸部以下横方向のヘラケズリ	焼成: 普通 色調: 灰色かった黒色 胎土: 2mm前後の砂粒(石英、長石) を多量に含む。
28	図版12	土師器	甕	口径17.8	S X 0 2 埋土	口縁部: ヨコナデ 外面: ヨコナデ、一部、縦方向のハケ調整 内面: 横方向のヘラケズリ	焼成: やや不良 色調: にぶい黄褐色 胎土: 1mm以下の白色砂粒を多量に含 む。
29	図版12	土師器	甕	口径17.8	S D 0 3 埋土	口縁部: 横方向のハケ調整の後にナデ 外側: 横方向へ上がりのハケ調整 内側: ヘラケズリの後ろにナデ	焼成: 良好 色調: 外 にぶい黄褐色 内 にぶい黄褐色 胎土: 0.5mm前後の 砂粒を含む。
30	図版12	土師器	甕	口径11.8	S D 0 3 埋土中層	口縁部: ヨコナデ 外側: ナデ? 内側: ヘラケズリ	焼成: 良好 色調: 外 橙色 内 純 い褐色 胎土: 1.5mm以下の砂粒を多 量に含む。
31	図版12	土師器	甕	口径22.2	自然流路 埋土中層	口縁部: ヨコナデ 外側: ハケ調整の後にナデ 内側: ヘラケズリ	焼成: 普通 色調: 外 にぶい黄褐色 内 浅黄褐色
32	図版12	土師器	器 台	口径17.8	S D 0 1 埋土	磨滅により不明	焼成: 普通 色調: 浅黄褐色 胎土: 1mm以下の砂粒を多量に含む。
33	図版12	土師器	高 杯	口径18.0	S D 0 3 埋土中層	磨滅により不明	焼成: 普通 色調: 外 浅黄褐色 内 淡褐色 胎土: 1mm以下の砂粒を多 量に含む。
34	図版12	土師器	高 杯	口径12.9	S B 0 1 埋土上層	磨滅により不明	焼成: やや不良 色調: 外 淡黄褐色 内 灰白色に近い淡黄褐色 胎土: 1 mm以下の砂粒を比較的多く含む。
35	図版12	土師器	高 杯	口径15.8	S B 0 1 埋土上層	磨滅により不明	焼成: やや不良 色調: 外 灰白色に 近い淡黄褐色 内 淡黄褐色 胎土: 0.5mm以下の砂粒を少量含む。
36	図版12	土師器	高 杯	口径16.8	S B 0 1 埋土上層	磨滅により不明	焼成: 普通 色調: 明るい褐色 胎土: 1.5mm以下の砂粒を含む。

第1表 大倉N遺跡I区出土土器観察表

番号	種図 又は 図版 番号	種類	器種	法量 (cm)	出土層位 又は遺構	調 整	焼成・胎土・色調
37	図版12	土師器	高杯	口径15.6	SD 03 埋土	磨滅により不明	焼成: 普通 色調: 浅黄橙色 胎土: 3前後の砂粒(主に石英・長石)を多量に含む。
38	図版12	土師器	高杯	—	SB 01 埋土上層	磨滅により不明	焼成: 普通 色調: 浅黄橙色 胎土: 1.5mm以下の砂粒を多量に含む。
39	図版12	土師器	高杯	—	SD 03-3 埋土上層	外側: ナデ? 内側: 横方向のヘラケズリ	焼成: 良好 色調: 外にぼい黄橙色 内: 灰色っぽい黒色 胎土: 1mm以下の砂粒を含む。
40	図版12	土師器	杯底? ?	口径13.2	SD 03-3 埋土中層	磨滅により不明	焼成: 普通 色調: 橙色 胎土: 1.5mm以下の白色砂粒を多量に含む。
41	図版12	土師器	皿	口径22.1	SD 02 埋土	磨滅により不明	焼成: 普通 色調: 灰白色に近い浅黄 橙色 胎土: 1mm以下の砂粒を多量に含む。
42	図版12	土師器 手づくね 土器	甕	口径 6.1	SD 02 埋土上層	磨滅により不明	焼成: やや不良 色調: 橙色 胎土: 1.5mm以下の白色砂粒を多量に含む。
43	図版12	土師器 手づくね 土器	甕	口径 5.0	SX 02 埋土上層	全体にナデ調整	焼成: 普通 色調: 浅黄橙色 胎土: 2mm以下の砂粒を多量に含む。
44	図版12	土師器 手づくね 土器	甕?	—	SD 03 埋土中層	磨滅により不明	焼成: 普通 色調: 浅黄色 胎土: 1mm以下の砂粒を多量に含む。
45	図版12	土師器 手づくね 土器	甕?	—	SD 03 埋土上層	磨滅により不明	焼成: 良好 色調: 外: 浅黄橙色 胎土: 1mm以下の砂粒を多量に含む。
46	図版13	須恵器	蓋	口径12.7 器高 4.3	SD 01 埋土上層	天井部外面: ヘラケズリ 天井部内面: ナデ その他: 回転ヘラケズリ	焼成: 良好 色調: 灰白色 胎土: 3mm以下の砂粒を多量に含む。
47	図版13	須恵器	蓋	口径13.6 器高 3.7	自然流路 埋土	天井部外面: ヘラケズリ 天井部内面: ナデ その他: 回転ヘラケズリ	焼成: 良好 色調: 青灰色 胎土: 1mm以下の砂粒を多量に含む。
48	図版13	須恵器	蓋	口径13.6 器高 4.2	SX 02 埋土上層	天井部外面: ヘラケズリ 天井部内面: ナデ その他: 回転ヘラケズリ	焼成: 良好 色調: 灰色 胎土: 1mm以下の砂粒を含む。
49	図版13	須恵器	蓋	口径12.1 器高 3.9	SX 02 埋土上層	天井部外面: ヘラケズリ 天井部内面: ナデ その他: 回転ヘラケズリ	焼成: 良好 色調: 青灰色 胎土: 1~3mmの砂粒を多量に含む。
50	図版13	須恵器	蓋	口径10.8 器高 3.9	SX 02 埋土上層	天井部外面: ヘラケズリ 天井部内面: ナデ その他: 回転ヘラケズリ	焼成: 良好 色調: 外: 青灰色 内: 灰色 胎土: 1.5~3.5mmの砂粒を多量に含む。
51	図版13	須恵器	蓋	口径12.8 器高 4.3	SD 02 埋土下層	天井部外面: ヘラケズリ 天井部内面: ナデ その他: 回転ヘラケズリ	焼成: 良好 色調: 灰色 胎土: 0.5mm前後の白色砂粒を含む。
52	図版13	須恵器	蓋	口径12.0 器高 4.0	自然流路 埋土	天井部外面: ヘラケズリ その他: 外面と口縁部内面: 回転ナデ 内面の大半: ナデ	焼成: 良好 色調: 青灰色 胎土: 1.5mm以下の白色砂粒を比較的 多量に含む。
53	図版13	須恵器	蓋	口径11.1 器高 4.0	自然流路 埋土上層	天井部外面: ヘラケズリ 天井部内面: ナデ その他: 回転ヘラケズリ	焼成: 良好 色調: 外: 灰白色 内: 明青灰色 胎土: 1~3mmの砂粒を含む。
54	図版13	須恵器	蓋	口径12.6 器高 4.5	自然流路 埋土上層	天井部外面: ヘラケズリ 天井部内面: ナデ その他: 回転ヘラケズリ	焼成: 良好 色調: 灰白色 胎土: 1~3mmの砂粒を含む。

第1表 大倉N遺跡I区出土土器観察表

番号	挿図 又は 図版 番号	種類	器種	法量 (cm)	出土層位 又は遺構	調 整	焼成・胎土・色調
55	図版13	須恵器	蓋	口径 8.5 器高 2.7	自然流路 埋土上層	つまみ部分:ナデ 天井部外面:回転ヘ ラケズリ 天井部内面:ナデ その他: 回転ナデ	焼成:良好 色調:明青灰色 胎土:1~2mmの砂粒を含む。
56	図版13	須恵器	蓋	口径 9.0	SD 0 1 埋土上層	天井部外面:回転ヘラケズリのちナデ 天井部内面:ナデ その他:回転ナデ	焼成:良好 色調:外灰白色 内 灰色 胎土:1mm以下の白色砂粒を含む。
57	図版13	須恵器	蓋	口径14.8 器高 3.1	SX 0 3 埋土	輪状つまみ部分:ナデ 天井部外面:回 転ヘラケズリ 天井部内面:ナデ その 他:回転ナデ	焼成:良好 色調:外青灰色 内 灰色 胎土:1.5~3mmの砂粒を比較的 の多量に含む。
58	図版13	須恵器	蓋	口径16.8 器高 2.3	自然流路 埋土中層	ナデ調整か?	焼成:良好 色調:外灰白色 内 灰色 胎土:1~3mmの砂粒を含む。
59	図版13	須恵器	杯	—	SB 0 1 埋土上層	底部外面:回転ヘラケズリ 底部内面:ナデ その他:回転ナデ	焼成:良好 色調:青灰色 胎土:2~3mmの砂粒を含む。
60	図版13	須恵器	杯	口径11.5 器高 3.4	SD 0 5 埋土	底部外面:回転ヘラケズリ 底部内面:ナデ その他:回転ナデ	焼成:良好 色調:青灰色 胎土:1mm以下の白色砂粒を含む。
61	図版13	須恵器	杯	口径11.1 —	SX 0 2 埋土	底部外面:回転ヘラケズリ 底部内面:ナデ その他:回転ナデ	焼成:良好 色調:灰色 胎土:1mm以下の白色砂粒を含む。
62	図版13	須恵器	杯	口径 9.8 器高 4.0	SD 03-4 埋土上層	底部外面:回転ヘラケズリ 底部内面:ナデ その他:回転ナデ	焼成:良好 色調:灰白色 胎土:2mm以下の砂粒を含む。
63	図版13	須恵器	杯	口径11.8	自然流路 埋土上層	底部外面:回転ヘラケズリ 底部内面:ナデ その他:回転ナデ	焼成:良好 色調:青灰色 胎土:0.5mm前後の砂粒を少量含む。
64	図版13	須恵器	杯	口径11.8 器高 4.6	SD 0 3 埋土上層	底部外面:回転ヘラケズリ 底部内面:ナデ その他:回転ナデ	焼成:普通 色調:青灰色 胎土:0.5mm以下の砂粒を少量含む。
65	図版13	須恵器	杯	口径12.0 器高 4.8	SD 0 3 埋土上層	底部外面:回転糸切り 底部内面:ナデ その他:回転ナデ	焼成:良好 色調:外明青灰色 内 青灰色 胎土:1mm以下の砂粒を少 量含む。
66	図版13	須恵器	杯	口径12.0 器高 4.4	SD 0 2 埋土下層	底部外面:回転糸切り 底部内面:ナデ その他:回転ナデ	焼成:良好 色調:外青灰色 内 灰色 胎土:3mm以下の砂粒を少量含む。
67	図版13	須恵器	杯	口径11.3 器高 4.3	SD 0 4 埋土	底部外面:回転糸切り 底部内面:ナデ その他:回転ナデ	焼成:やや不良 色調:灰色 胎土:1mm以下の白色砂粒を含む。
68	図版13	須恵器	杯	口径14.6 器高 5.3	自然流路 埋土上層	底部外面:回転ヘラケズリのちナデ 底部内面:ナデ その他:回転ナデ	焼成:普通 色調:灰白色 胎土:1~2mmの砂粒を比較的の多量に 含む。
69	図版13	須恵器	杯	口径13.8 器高 5.2	自然流路 埋土上層	底部外面:回転ヘラケズリのちナデ 底部内面:ナデ その他:回転ナデ	焼成:良好 色調:青灰色 胎土:2mm以下の白色砂粒を含む。
70	図版13	須恵器	杯	口径13.8 器高 5.2	SD 0 2 埋土下層	底部外面:不明 底部内面:ナデ その他:回転ナデ	焼成:良好 色調:外青灰色 内 明青灰色 胎土:1mm以下の白色砂粒 を含む。
71	図版13	須恵器	杯	口径16.0 器高 5.6	自然流路 埋土上層	底部外面:回転ヘラケズリのちナデ 底部内面:ナデ その他:回転ナデ	焼成:良好 色調:外青灰色 内 明青灰色 胎土:1mm以下の白色砂粒 を多量に含む。
72	図版13	須恵器	杯	口径14.3 器高 5.5	自然流路 埋土上層	底部外面:回転ヘラケズリのちナデ 底部内面:ナデ その他:回転ナデ	焼成:普通 色調:明青灰色 胎土:1mm以下の砂粒を含む。

第1表 大倉N遺跡I区出土土器観察表

番号	図版 又は 写真 番号	種類	器種	法量 (cm)	出土層位 又は遺構	調 整	焼成・胎土・色調
73	図版13	須恵器	杯	口径14.9 器高 5.6	SD 0 2 埋土下層	底部外面：ナデ 底部内面：ナデ その他：回転ナデ	焼成：良好 色調：外 青灰色 内 明青灰色 胎土：1mm以下の砂粒と2mm程度の白色砂粒を含む。
74	図版13	須恵器	杯	口径 9.0 器高 4.1	SD 0 4-3 埋土	底部外面：ナデ 底部内面：ナデ その他：回転ナデ	焼成：良好 色調：灰白色 胎土：2mm以下の砂粒を含む。
75	図版13	須恵器	杯	口径12.0 器高 5.0	自然流路 埋土	底部外面：ナデ 底部内面：ナデ その他：回転ナデ	焼成：良好 色調：灰色 胎土：0.5~2mm程度の白色砂粒を比較的多量に含む。
76	図版13	須恵器	杯	—	自然流路 埋土	全体的にヨコ方向にナデ	焼成：良好 色調：浅黄褐色 胎土：2mm以下の砂粒を多量に含む。
77	図版13	須恵器	杯	—	自然流路 埋土上層	底部外面：回転糸切り 底部内面：ナデ その他：回転ナデ	焼成：やや不良 色調：灰白色 胎土：2mm以下の砂粒を含む。
78	図版13	須恵器	杯	口径17.3 器高 2.6	自然流路 埋土上層	底部外面：回転糸切り 底部内面：ナデ その他：回転ナデ	焼成：普通 色調：外 灰白色 内 灰色 胎土：0.5mm以下の砂粒を少量含む。
79	図版13	須恵器	コ形 ツチ ブ器	—	自然流路 埋土上層	底部外面：回転糸切り 底部内面：ナデ その他：回転ナデ	焼成：良好 色調：青灰色 胎土：0.5mm以下の砂粒を少量含む。
80	図版13	須恵器	杯	口径14.6 器高 2.7	自然流路 埋土中層	底部外面：ナデ 底部内面：ナデ その他：回転ナデ	焼成：良好 色調：灰白色 胎土：4mm以下の砂粒を含む。
81	図版14	須恵器	高 杯	口径14.4 器高10.0	SD 0 1 埋土	杯部の底部内面：ナデ その他：回転ナデ	焼成：良好 色調：外 青灰色 内 明青灰色 胎土：1.5mm以下の白色砂粒を比較的多量に含む。
82	図版14	須恵器	高 杯	—	自然流路 埋土	杯部内面：ナデ その他：ヨコ方向のナデ	焼成：良好 色調：外 青灰色 内 明青灰色 胎土：1mm以下の砂粒を含む。
83	図版14	須恵器	高 杯	口径16.8 器高 9.8	自然流路 埋土上層	杯部の底部内面：ナデ 杯部のその他：回転ヘラケズリのちナデ 脚部内外面：回転ナデ	焼成：良好 色調：明青灰色 胎土：1~2mm程度の白色砂粒を多量に含む。
84	図版14	須恵器	高 杯	口径14.6	自然流路 埋土上層	杯部の底部内面：ナデ その他：回転ナデ 杯部の底面外側から脚部にかけての一部：回転ヘラケズリのちナデ	焼成：普通 色調：明青灰色 胎土：0.5~1.5mm前後の砂粒を多量に含む。
85	図版14	須恵器	盤 重	口径22.9 器高 6.3	自然流路 埋土上層	杯部の底部内面：ナデ その他：回転ナデ 杯部の底面外側から脚部にかけての一部：回転ヘラケズリのちナデ	焼成：良好 色調：外 青灰色 内 灰色 胎土：1~3mm程度の砂粒を比較的多量に含む。
86	図版14	須恵器	蓋	—	自然流路 埋土上層	底部外面：ヘラケズリ 底部内面：ヘラケズリ その他：回転ナデ	焼成：良好 色調：外 灰色 内 灰白色 胎土：1mm以下の砂粒を含む。
87	図版14	須恵器	蓋	—	自然流路 埋土	外面：ナデ 内面：回転ナデ	焼成：良好 色調：灰色 胎土：1mm以下の白色砂粒を含む。
88	図版14	須恵器	甕	口径12.8	SD 0 2 埋土下層	外面：タキ 内面：押当具痕 口縁部内外面：ヨコ方向のナデ	焼成：良好 色調：青灰色 胎土：0.5~3mm程度の砂粒を含む。
89	図版14	須恵器	甕	口径21.2	自然流路 埋土	外面：タキ 内面：押当具痕 口縁部内外面：ヨコ方向のナデ	焼成：良好 色調：青灰色 胎土：1mm以下の白色砂粒を比較的多量に含む。
90	図版14	須恵器	甕	口径16.5	SD 0 2 埋土中層	外面：タキ 内面：押当具痕 口縁部内外面：ヨコ方向のナデ	焼成：良好 色調：青灰色 胎土：1~3mm程度の白色砂粒を含む。

第1表 大倉N遺跡I区出土土器観察表

番号	挿図 又は 図版 番号	種類	器種	法量 (cm)	出土層位 又は遺構	調 整	焼成・胎土・色調
91	図版14	須恵器	甕	口径22.6	自然流路 埋土上面	外面：タタキののちナデ 内面：押当具痕 口縁部内外面：ヨコ方向のナデ	焼成：良好 色調：灰色 胎土：1mm以下の砂粒を含む。
92	図版14	須恵器	甕	口径20.6	SD02 埋土下層	外面：タタキ 内面：押当具痕 口縁部内外面：ヨコ方向のナデ	焼成：良好 色調：外 灰白色 内 暗灰色 胎土：1.5 mm以下の砂粒を含む。
93	図版14	須恵器	甕	口径21.4	自然流路 埋土	口縁部内外面：ヨコ方向のナデ	焼成：良好 色調：外 灰白色 内 灰色 胎土：1mm程度のやや大きめの 長石を含む。
94	図版14	須恵器	甕	口径18.8	SD04-I 埋土下層	外面：タタキ 内面：押当具痕 口縁部内外面：ヨコ方向のナデ	焼成：良好 色調：外 青灰色 内 灰白色 胎土：1.5 mm以下の砂粒を含む。
95	図版14	土師質 土器	杯	——	自然流路 埋土上	外面：ヨコ方向のナデ 内面：ヨコ方向のナデ	焼成：普通 色調：外 暗褐色 内 浅黄褐色 胎土：1mm以下の砂粒を含む。

第2節 II区の調査 (第1図)

調査区は標高12m程度の狭い谷部である。層位的には、地表面から1mないし1.5m程度掘削すると黄褐色の地山が露呈する。この表土と地山の間で層厚が約20cmの炭化物、焼土のほか、古墳時代後期以降を主体とする遺物を含んだ遺物包含層を確認した。

遺構 (図版4・31)

遺構としては、谷筋の最も深いところで焼成土坑、土坑、溝状遺構を検出した。

SK 01は長辺約80cm、短辺約60cmの楕円形に近い隅丸の長方形プランをもち、深さ10cmを測る。壁面に火をうけた痕跡、坑底に多量の炭化物が認められた。埋土より遺物が検出されなかったために時期は不明である。

SK 02は長辺が約1m、短辺約50cmのほぼ楕円形を呈し、深さは約10cmを測る。埋土より土師質土器、鉄釘、炭化材、円礫とわずかではあるが骨片が検出されたことにより、奈良・平安期以降の埋葬施設の可能性がある。

SD 01は谷筋に沿って検出された。長さは5.6m以上、幅が約1m、深さは最深部で40cmを測る。東端には、SK 02が含まれ、時期的にはSK 02よりも古いと考えられる。埋土より土師器、須恵器が出土した。

遺物 (図版17・49、第6図)

113は須恵器の杯である。口縁部はやや内湾気味に丸がり、底部は上げ底である。口径は10.4cm、器高は4.1cmで焼成は良好で青灰色を呈し、胎上は精緻である。遺物包含層より出土した。

114～127は鉄釘である。114～126は頭部を折り曲げ平坦を成し、断面は方形を呈する。127は他のものとは異なり、大型で頭部は三角形で、折り曲げてつくられたものではなく、いわゆる傘状である。

114は長さが復元ではあるが5.8cm、重量は2.8gを測る。SK 02埋土より出土した。

115は長さが4.6cm、重量は2.1gを測り、SK 02埋土より出土した。

116は長さ5.0cm、重量は1.6gを測り、銹化の進行が認められる。SD 01埋土より出土した。

117は長さが5.0cm、重量は2.1gを測り、焼けた痕跡が認められる。また、付着物があり、朱の可能性もある。



113



第6図 大倉N遺跡II区出土の土器

SK 02埋土より出土した。

118は長さ4.0cm、重量は1.85gを測り、かなり劣化、剥離が進行している。SK 02埋土より出土した。

119は先端が欠損し長さは復元であるが4.0cm、重量は1.65gを測る。剥離の進行が認められる。SK 02埋土より出土した。

120は長さ4.3cm、重量1.7gを測り、錫化の進行が認められる。SK 02埋土より出土した。

121は長さ4.6cm、重量2.25gを測り、保存状態は良好である。遺構面上層で検出した。

122は長さ4.6cm、重量2.0gを測り、やや錫化の進行が認められる。遺構面上層で検出した。

123は長さ4.4cm、重量1.75gを測り、剥離の進行が認められる。また、付着物があり、朱の可能性もある。遺構面上層で検出した。

124は長さ4.3cm、重量1.65gを測り、やや錫化の進行が認められる。遺構面上層で検出した。

125は長さ4.4cm、重量2.25gを測り、やや錫化の進行が認められる。遺構面上層で検出した。

126は長さ6.0cm、重量3.3gを測り、保存状態は良好である。遺構面上層で検出した。

127は長さ9.0cm、重量12.1gを測る。遺物包含層から出土した。

第3節 III区の調査（第1図）

A地区は標高約11m、B地区は標高約8mで、ともに同一の谷筋に位置している。A地区は地表から1.4m下で地山が露呈するが、表土と地山の間で2面の遺構面が確認された。B地区については地表下約1mで黄褐色の地山が露呈する。遺物包含層は隣接するII区のものとほぼ同様の様相を呈している。

遺構（図版5・6・32）

A地区においては、第I面で溝が1条、第II面については、溝が2条検出された。これらはいずれも、自然の流路と考えられる。B地区でも流路と思われる溝が2条とカギ状の溝状遺構、ピットなどが検出された。

SD 01はA地区の第I面で検出された。幅1.4～2m、深さは約50cmを測る。A地区の第II面で検出されたSD 02は、最大幅が1.8m、深さは最深部で50cm、埋土は炭化物を含んだ黒灰色土で、埋土中より上師器、須恵器が数点出土した。

SD 03は最大幅が4mで、最深部の深さは50cmを測り、埋土中より上師器、須恵器が出土した。

SD 04は幅が約1m、最深部の深さは70cmを測り、SD 02のつづきと思われる。

B地区的北端で検出されたSD 05は幅が約3m、最深部の深さは70cmを測り、埋土は黒色土と青灰色砂質土の2層で構成され、埋土中より須恵器などの遺物が少量出土した。

SD 06は調査区南端にかかり、幅、深さとともに不明である。また、埋土中より遺物は確認出来なかつた。

遺物（図版18・19・50・51）

128は土師質十器の皿である。口縁部に向け外傾してのび、底部はやや上げ底である。調整は磨滅により不明で、焼成は普通、浅黄橙色を呈し直徑0.5mm程度の砂粒を少量含む。A地区のSD 04より出土した。

129は土師質土器の高台付碗である。高台は「ハ」の字状に開き、途中で屈曲し外反する。焼成はやや不良で浅黄橙色を呈し、直徑1.5mm以下の砂粒を含む。

130は須恵器の杯である。口径は11.1cmを測り、口縁部はほぼ垂直に上がる。端部は厚くやや外反し、底部は上げ底気味である。調整は底部外面が糸切り、底部内面はナデで、その他は回転ナデである。焼成は良好で青灰色を呈し、胎土は精緻で直徑1mm以下の砂粒を含む。A地区のSD 04より出土した。

131は須恵器の杯である。口径は12.8cmを測り、口縁部は大きく開き、端部はややふくらんで、尖り気味である。底部は平坦で、焼成はやや不良、灰白色を呈し、胎土は精緻で直徑1mm以下の砂粒を含む。B地区のSD 05より出土した。

132も須恵器の杯である。口径は11.2cmを測り、口縁部は外傾して上がる。端部は丸く、底部は平坦で、糸切り痕を有する。焼成は良好で灰白色を呈し、胎土は精緻で直徑1mm以下の砂粒を含む。B地区のSD 05下層より出土した。

133は須恵器の高台付椀である。口径は14.6cmを測り、口縁部は外傾してのびる。端部はやや外反し、高台は短くやや外へ開く。焼成はやや不良、灰白色を呈し、胎土はやや粗く、直徑3mm以下の砂粒を含む。A地区のSD 04より出土した。

134は須恵器の杯である。口径は13.5cmを測り、口縁部は外傾して上がる。端部は丸く、やや外反し、底部は上げ底気味である。焼成は良好で、灰白色を呈し、胎土は精緻で直徑2mm以下の砂粒を含む。A地区のSD 04より出土した。

135は須恵器の高台付杯である。口径は18.0cmを測り、口縁部は大きく開き、器壁は厚い。端部は丸く、高台部分はまっすぐにのび短い。焼成はやや不良で灰白色を呈し胎土は精緻で直徑1.5mm以下の砂粒を含む。A地区のSD 04より出土した。

136・137・138は須恵器の甕である。

136は口径が21.2cmを測る。頸部は外反してのび、肩部はやや下がり気味である。調整は頸部から口縁部にかけてヨコ方向のナデ、肩部から下の外面はタタキ、内面は当貝痕を有する。また、外面全体的に自然釉が付着している。焼成は良好で、内外面ともに灰色を呈している。A地区のSD 04より出土した。

137は口径が32.2cmを測る。頸部は外反して上がり、肩部はゆるやかに内湾して下がる。調整は頸部から口縁部にかけてヨコ方向のナデ、肩部から下の外面はタタキ、内面は当貝痕を有する。焼成は良好で、内外面ともに灰色を呈している。胎土は精緻で直徑1mm以下の砂粒を含む。B地区のSD 05より出土した。

138は口径が17.6cmを測る。頸部は外反してのび、肩部はやや内傾して下る。調整は頸部から口縁部

にかけてヨコ方向のナデ、肩部から下の外面はタタキ、内面は当其痕を有する。焼成は良好で、内外面ともに灰色を呈している。胎土は精緻で直径1mm以下の砂粒を含む。A地区のSD04より出土した。

第4節 M区の調査(第1図)

位置(第1図)

当該調査区は、大倉IV遺跡の東端に位置し、人倉谷の少し入り込んだ標高9m程度の狭い谷あいに立地する。

現況は荒廃地であるが、谷の少し奥に溜池が存在し、ごく最近まで水田が営まれていたものと思われる。

層位(図版8)

表面を覆う盛土と地山の間に、1~3層の堆積層が認められた。地山と堆積層の様相は、検出された谷地形を境に北側と南側では全く異なるものである。北側では基本的に層厚20~30cm程度の橙色のシルト層の下で褐色~黄橙色の地山が露呈するのに対し、南側では盛土を取り除くと上から層厚10cm程度の暗赤褐色の粘質土と1層ないし2層の層厚15~20cmの褐色砂を介在して、1~10mm大的クサリレキを多量に含んだ青灰色砂礫の地山に達する。

谷地形より北側の地山が堅くしまり、安定しているのは、尾根先端の張り出し部分であるためだと思われる。南側のものについては、地形的に尾根裾から谷筋という非常に土壤が堆積し易い部分であり、地山として、安定した様相とは言い難い。

遺構(図版7・9・33・34)

遺構の検山作業は、湧水により困難を極めたが、最終的に地山面での検出を試みた。その結果として、谷地形、ピット、土坑などが確認された。

なかでも、調査区中央部で、東から西に向けて認められた幅7.2~9m、深さ1.4~1.6mの谷地形は、断面が緩やかな「U」字状を呈する。埋土の堆積状況からいえば、自然堆積であることは間違いないと思われ、中層から下層にかけて有機物を含んだ砂が堆積していることから、ある意味で自然の流路であったことがうかがえる。埋土中からは、土器、土製品、木製品が多数出土し、時期的には、古墳時代以降のものが主である。また、調査区中央部に入れた先行トレンチにより、この谷地形は東西に分断されているが、出土遺物の内容的に、おおむね、この先行トレンチから東側では、須恵器が、西側では土師器・木製品が中心という傾向が見受けられる。特に、西側からは祭祀的要素が強いといわれている手づくり土器が12点出土したことにより、祭祀の場が近くにあり放棄したものか、あるいは、この谷地形の流路自体が祭祀的意味をもっていた可能性があると考えられる。

ピットは直径12cm、深さ約10cmのものから、長辺72cm、短辺48cmの掘り方をもつものまで約80ヶ所確認され、主に谷地形の北側で検出されたが、残念ながら建物跡として判断されるものは認めることができなかった。

SK 01はプランが長辺64cm、短辺48cmの不定形で、深さは最深部で約20cmを測る。埋土より不明鉄製品が1点出土したが、時期は不明である。

遺物（図版20～29・52～58、第7・8図）

139は土師器の短頸丸底壺である。口径11.5cm、器高10.9cmを測り、口縁部は短くやや外反し、調整は口縁部が内外面ともにヨコ方向のナデ、胴部外面はハケによる調整、胴部内面はヨコ方向のヘラケズリである。焼成は良好で、にぶい黄橙色を呈する。谷地形西側下層より出土した。

140は土師器小型丸底壺で、口縁部はわずかに内湾しながらび、胴部はほぼ球形を呈する。内外面はかなり磨滅しているが、一部にナデの痕跡が認められる。色調は浅黄橙色で、胎土は直径1mm以下の砂粒をやや多く含む。谷地形西側下層より出土した。

141、142は上師器の複合口縁の壺である。

141は復元口径15.4cmを測る複合口縁部はやや外反し、突出部の稜は鈍い。突出部から上は短く、端部は平坦面をなす。調整は口縁部内外面ともヨコ方向のナデ、肩部外面はヨコ方向のハケ調整、内面はヨコ方向からやや右上がりのヘラケズリが施されている。焼成は良好でにぶい黄橙色を呈し、胎土は直径2mm以下の砂粒を多く含む。谷地形東側下層より出土し、草田編年の6期ないし7期に位置づけされるものと思われる^①。

142は口径12.8cmで、複合口縁部は短くほぼ直立してのびる。端部は平坦面を成し、肩部には羽状文が施されている。調整は口縁部内外面ともヨコ方向のナデ、胴部外面はハケ調整で、内面はヨコ方向からやや右上がりのヘラケズリが施されている。焼成は良好で明黄褐色を呈し、胎土は直径1mm以下の砂粒を多く含む。谷地形西側中層より出土し、丸底とすれば草田編年の7期に位置づけされるものと考えられる^②。

143～147は上師器の単純口縁の壺である。

143は復元口径20.0cmを測り、口縁部は外傾し、端部は丸い。内外面ともに磨滅のため調整は不明である。胎土は直径3mm以下の砂粒をおびただしく含む。谷地形西側上層より出土した。

144は復元口径15.0cmを測り、口縁部は外反してのびる。外面は磨滅により調整は不明であるが、口縁部内面はヨコ方向のナデ、胴部内面は基本的にヨコ方向のヘラケズリが施されている。焼成は良好で色調は浅黄橙色を呈し、胎土は直径2mm以下の砂粒をおびただしく含み、なかには4mm程度のものもある。谷地形東側下層より出土した。

145は復元口径16.0cmで、口縁部は短く外反してのびる。外面は磨滅により調整は不明であるが、口縁部内面はヨコ方向のナデ、胴部内面はやや左上がりのヘラケズリのうちにナデが施されている。焼成は良好で色調は外面がにぶい黄橙色、内面はにぶい黄褐色を呈し、胎土は直径2mm以下の砂粒をやや多めに含む。谷地形西側下層より出土した。

146は口径が16.8cmを測る。口縁部は外反してのび、端部は丸い。調整は口縁部内外面がヨコ方向のナデ、胸部外面はハケ調整、内面はヨコ方向から左上がりのヘラケズリである。色調は外面が明黄褐色、内面は褐色で、胎土は直径1mm以下の砂粒を多く含む。また、外面全体的にススの付着が認められる。谷地形西側下層より出土した。

147は復元口径15.6cmを測り、口縁部は外傾してのび、端部は丸い。調整は口縁部内外面がヨコ方向のナデ胸部外面はハケ調整、内面はヨコ方向のヘラケズリのうちにナデている。色調は外面が明黄褐色～褐色、内面は浅黄橙色～にぶい黄褐色、胎土は直径1mm以下の砂粒を多く含む。谷地形西側下層より出土した。

148は上師器の椀である。復元口径は11.6cmを測り、焼成は良好で色調は橙色～赤褐色を呈する。胎土は直径0.5mm以下の砂粒を多く含み、なかには2～3mmのものも目立つ。谷地形西側下層より出土した。

149は土師器高杯の杯部である。外面に段をもち、段から口縁部に向けて外反してのびる。口径は16.2cmを測り、焼成はやや不良で色調は黒灰色～浅黄橙色である。胎土は直径2mm以下の白色の砂粒をおびただしく含む。谷地形西側下層より出土した。

150は上師器高杯の脚部である。「ハ」の字状に開き、調整は内外面ともにヨコ方向のナデと思われる。焼成は良好で外面は暗褐色、内面はにぶい黄橙色、胎土は直径2mm以下の砂粒を多く含む。谷西側下層より出土した。

151は人型の土師器蓋である。胴部から口縁部にむけてほぼ直線的にのび端部付近で外傾する。復元口径は30.6cmで、焼成は良好、色調は橙色を呈する。胎土は直径2mm以下の砂粒を多量に含む。谷地形西側下層より出土した。

152～156は須恵器蓋である。

152は復元口径12.4cm、器高3.6cmで大井部と口縁部の境に沈線を2条有する。天井部外面は回転ヘラケズリ、天井部内面はナデ、その他の部分は回転ナデである。焼成は良好で、外面は灰白色～灰色、内面は明青灰色を呈する。胎土は直径1mm以下の白色砂粒を多量に含む。谷地形東側下層より出土した。

153は口径11.6cm、器高3.9cmを測る。口縁部は内湾気味に下り、端部は丸い。天井部外面は回転ヘラケズリ、天井部内面はナデ、その他の部分は回転ナデである。焼成は良好で、外面は青灰色、内面は明青灰色である。胎土は直径1mm以下の砂粒を含む。谷地形西側上層より出土した。

154は復元口径が12.8cm、器高は4.3cmで、口縁部は内傾して下り、端部は丸い。天井部外面は回転ヘラケズリのうちにナデ、天井部内面はナデ、その他の部分は回転ナデである。焼成は良好で、外面は明青灰色～青灰色、内面は灰色を呈する。胎土は直径0.5mm前後の砂粒を比較的多く含む。谷地形西側中層より出土した。

155は口径が12.1cm、器高は4.0cmを測り、口縁部は内傾して下りる。また、天井部は浅く丸みをもつ。焼成は良好で、外面は灰色、内面は暗青灰色で、胎土は直径0.5mm前後の白色砂粒を含む。谷地形東側下層より出土した。

156は口径が12.8cm、口縁部は内傾して下り、大井部は高く、稜は沈線状を呈する。焼成は良好で色

調は明青灰色～青灰色で、胎土は直径1mm以下の砂粒を含む。谷地形西側下層より出土した。

157～159は須恵器杯である。

157は復元口径が11.2cm、器高は4.2cmを測り、たちあがりは内湾してのびる。受部は上外側にのび、端部は丸い。焼成は良好で、外面は青灰色、内面は明青灰色を呈する。胎土は直径1mm以下の白色砂粒を比較的多く含む。谷地形西側中層より出土した。

158は口径が11.3cm、器高は4.2cmで、たちあがりは内傾してのび、端部付近でごくわずかに外反し、端部はやや尖り気味である。受部は短くやや内湾してのび、端部は丸い。焼成は良好で、外面が青灰色、内面は灰色である。胎土は直径1mm以下の砂粒を含む。谷地形西側下層より出土した。

159は復元口径が13.0cm、器高は4.2cmを測る。口縁部は外傾してのび、端部近くでごくわずかに外反し、端部は丸い。焼成はやや不良で、色調は灰色を呈する。胎土は直径1mm以下の砂粒をやや多く含む。谷地形東側中層より出土した。

160は須恵器甌で頸部と肩部に櫛描文を有する。焼成は良好で、色調は灰色を呈する。胎土は直径1.5mm以下の砂粒をやや多く含む。谷地形東側下層より出土した。

161～163は須恵器の高杯である。

161は復元口径が13.8cm、器高は11.1cmを測る。杯の口縁部は外傾してのび、端部は丸く、透かしを有する。焼成は普通で、色調は灰色を呈する。胎土は直径1.5mm以下の白色砂粒を比較的多く含む。谷地形西側中層より出土した。

162は復元口径が14.0cmで、脚部は欠損しているために器高は不明である。杯の口縁部は外傾してのび端部は丸く、2条の沈線を有する。焼成は良好で、外面は灰白色～灰色、内面は灰白色を呈する。胎土は直径1mm以下の砂粒を含む。谷地形東側下層より出土した。

163は有蓋の高杯で、復元口径が14.0cm、脚部は欠損しているために器高は不明である。杯部のたちあがりは内傾してのび、端部付近でごくわずかに外反する。受部は短くほぼ水平にのび、端部は丸い。焼成は普通で、外面は青灰色、内面は灰白色を呈する。胎土は直径2mm以下の砂粒をやや多く含む。谷地形西側上層より出土した。

164は須恵器の甌である。復元口径が23.7cmを測り、頸部は外傾してのび、口縁部はやや外反して上がる。また、頸部には波状文を有する。全体的にヨコ方向のナデで調整されているが、内面は自然釉がかかり、明らかではない。焼成は良好で、色調は青灰色を呈する。胎土は直径1mm以下の砂粒を含むが、なかには3mm程度のものもある。谷地形東側下層より出土した。

165～176は手づくね上器である。

165は口径が6.3cm、器高は4.0cmを測り、丸い底部から内湾しながら口縁部へのびる。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色を呈する。胎土は直径1.5mm以下の砂粒を多く含む。谷地形西側下層より出土した。

166は口径が5.8cm、器高は4.7cmで、やや丸めの底部からわざかに内湾しながら口縁部に向かう。焼成は普通で、浅黄橙色を呈し、胎土は直径2mm以下の砂粒を多く含む。谷地形西側下層より出土した。

167は口径6.0cm、器高4.5cmを測り、ほぼ水平な底部からわざかに内湾しながら口縁部に上がる。端部はやや尖り気味である。焼成は普通で、にぶい黄橙色を呈し、胎土は直径1mm以下の砂粒を多量に

含む。谷地形西側下層より出土した。

168は口径が7.0cm、器高は4.7cmを測り、やや丸みのある底部からほぼ直線的に体部がのびる。焼成は良好で、淡橙色を呈する。谷地形西側下層より出土した。

169は口径が6.7cmで器高は4.5cmを測り、平らな底部からわずかに内湾しながらちあがる。焼成は良好で、にぶい黄橙色を呈し、胎土は直径2mm以下の砂粒を多量に含む。谷地形西側下層より出土した。

170は復元口径が7.0cm、器高は4.7cmを測り、平らな底部から口縁部に向けて大きく開き、端部近くでやや内傾する。焼成はやや不良、浅黄橙色を呈し、胎土は直径1.5mm以下の砂粒を多量に含む。谷地形西側埋土より出土した。

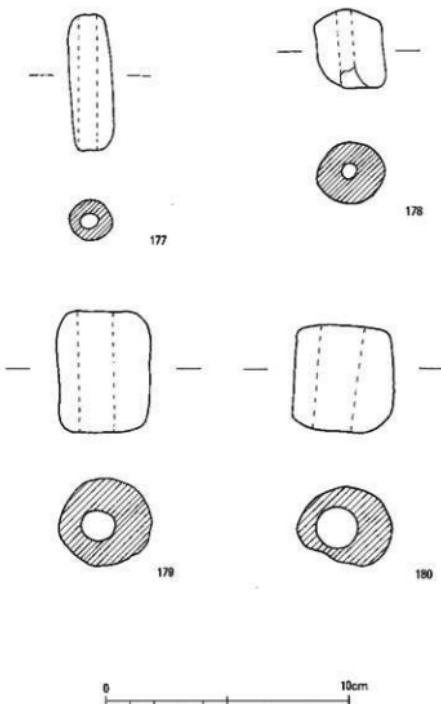
171は口径が7.4cm、器高は4.7cmを測り、やや丸みのある底部から口縁部に向かって、内湾気味にたちあがる。焼成は良好で、浅黄橙色を呈し、胎土はなかに3mm程度のものも含まれるが、大半は直径1mm以下の砂粒で、多量に含まれている。谷地形西側下層より出土した。

172は口径が8.0cm、器高は5.0cmで、平らな底部から内湾気味に口縁部に向けてたちあがる。焼成は良好で、にぶい橙色を呈し、胎土は直径1mm以下の砂粒を含んでいる。谷地形西側下層より出土した。

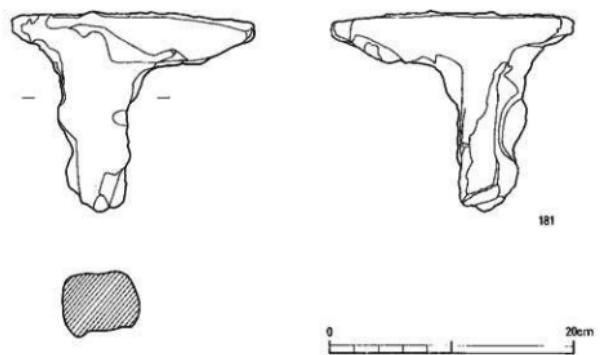
173は口径が6.1cm、器高は5.95cmを測り、平らな底部から内湾気味にたちあがり、口縁部付近でごくわずかに外反する。焼成は良好で、浅黄橙色を呈し、胎土は直径1mm以下の砂粒を多く含む。谷地形西側下層より出土した。

174は口径が7.7cm、器高は5.9cmで、平らな底部からごくわずかに内湾しながらちあがり、端部は尖り気味である。色調はにぶい橙色～にぶい褐色を呈し、胎土は直径1mm以下の砂粒を多く含むが、なかに、8mm程度の大粒なものが一つ見られる。谷地形西側下層より出土した。

175は口径が9.0cm、器高は6.0cmを測り、ほぼ平らな底部から大きく開き、端部は丸い。焼成は良好で、橙色を呈する。谷地形西側下層より出土した。



第7図 大倉N遺跡N区出土の土製品



第8図 大倉IV遺跡IV区出土の鉄製品

176は口径が9.0cm、器高は7.0cmで、丸い底部から内湾しながらたちあがる。焼成は良好で、にぶい橙色を呈する。谷地形西側下層より出土した。

177～180は筒状の十鍾である。178～180は厳密にいえば土鍾か紡錘車か明らかではないが、ここでは十鍾として、一括で扱うこととする。

177は最大径1.8cm、全長5.5cm、孔径は7mm、断面は円形で、色調は淡黄褐色～灰黃白色を呈する。谷地形埋土より出土した。

178は最大径2.8cmで、全長は一部欠損しているために不明である。孔径は6mmを測り、断面はほぼ円形で、色調は全体的に褐色を呈している。谷地形埋土より出土した。

179は最大径が3.9cm、全長は5.0cm、孔径は大きく、1.4cmで断面は円形で、色調は全体的に褐色を呈している。谷地形埋土より出土した。

180は一部欠損しているが、最大径4.1cm、全長4.3cm、孔径は1.7cmを測る。色調は全体的に褐色を呈している。谷地形埋土より出土した。

181は不明鉄製品である。「Г」字状を呈し断面は方形で、時期、用途などは不明である。SK 01より出土した。

182～192は木製品である。すべて谷地形西側下層より出土した。

182は鍔の身の部分である⁶。長径28.4cm、短径が19.2cm、最大厚は1.2cmを測り、先端には鉄製の刃を着けたものと思われる。また、柄孔には柄の先端と柄を止めた木製の楔が残存している。材質はアカガシ亞属に属する樹種である。

183は横鍔である⁶。長辺46.4cm、短辺が17.8cmの方形で、最大厚は3.4cmを測り、泥除けがついていると考えられ、泥除けを装着するための木の皮が残存している。材質はアカガシ亞属に属する樹種である。

184は、孔の配置から田下駄と考えられる⁸。全長49.8cm、最大幅7.4cmで、最大厚は1cmを測る。緒孔の他、両先端にそれぞれ一つづつの孔を有する。材質はヒノキである。

185・186は横柵である⁹。

185は全長33.6cm、敲打部の最大幅は8.0cmで断面はやや隅丸に近い円形である。材質はアカガシ亜属に属する樹種である。

186は柄の先端が欠損しているため、全長は33.4cm以上で、敲打部の最大幅は8.8cmで断面はほぼ円形である。材質はツバキである。

187は梯子である¹⁰。欠損しているため、全長は51.4cm以上、足掛け部分は三つ見られるが、この部分の最大厚は5cmを測る。材質はサクラ科に属する樹種と思われる。

188は下駄あるいは田下駄の一部とも思われるが、欠損しているために、判断はしがたい。端に一つ孔が認められる。材質はケヤキである。

189の用途は不明であるがナイフで鉛筆を削るように、先端を削って尖らせた痕跡が認められる。材質はサカキである。

190は方形の台状木製品である¹¹。同じものが松江市のタテチョウ遺跡からも出土しており、平面は一辺21cm～22cmの方形で、高さ10cmを測る。断面は台形状であるが、上部には方形の孔があり、底部へ向けて凸状にこの孔がひろがる。材質はケヤキである。

191は杓子形木製品である¹²。全長は78.4cm、柄は最大幅が3.2cmを測り、断面は円形である。身の部分は最大幅が4.0cm程度で、断面は最大厚1cmのレンズ状を呈する。材質はアカガシ亜属に属する樹種である。

192はかなり大型の不明木製品である。両端が欠損しているため、全長は1m36cm以上、最大幅は24cm、断面は最大厚4.4cmの方形である。平面はしいていえば眼鏡形を呈し、貫通させた方形の孔を二つ有する。材質はスギである。

第5節 大倉N遺跡出土の銅錢（第9図）

I区北端より、北へ約100mの地点で、範囲確認の調査の際に地表面から約60cm下の旧耕土と思われる青灰色粘土上面より、銅錢が33枚一括で出土した。周辺を精査し遺構の検出を試みたが、遺構は確認されなかったため、遺構に伴うものではないと思われる。また、紐自体は確認されなかったが、その大半がびったりと重なりあった出土時の状況から判断すると、もともとは紐に通されていたものと思われる。

これらの銅錢はすべて渡米錢である。ただし、わが国において、模鋳されたものかどうかまでは不明である。

193～199は開元通寶で、初鋳年代は621年である。

193は直徑2.4cm、重量は2.7gを測る。

194は直徑2.4cm、重量は2.3gを測る。

195は直徑2.4cm、重量は3.5gを測る。

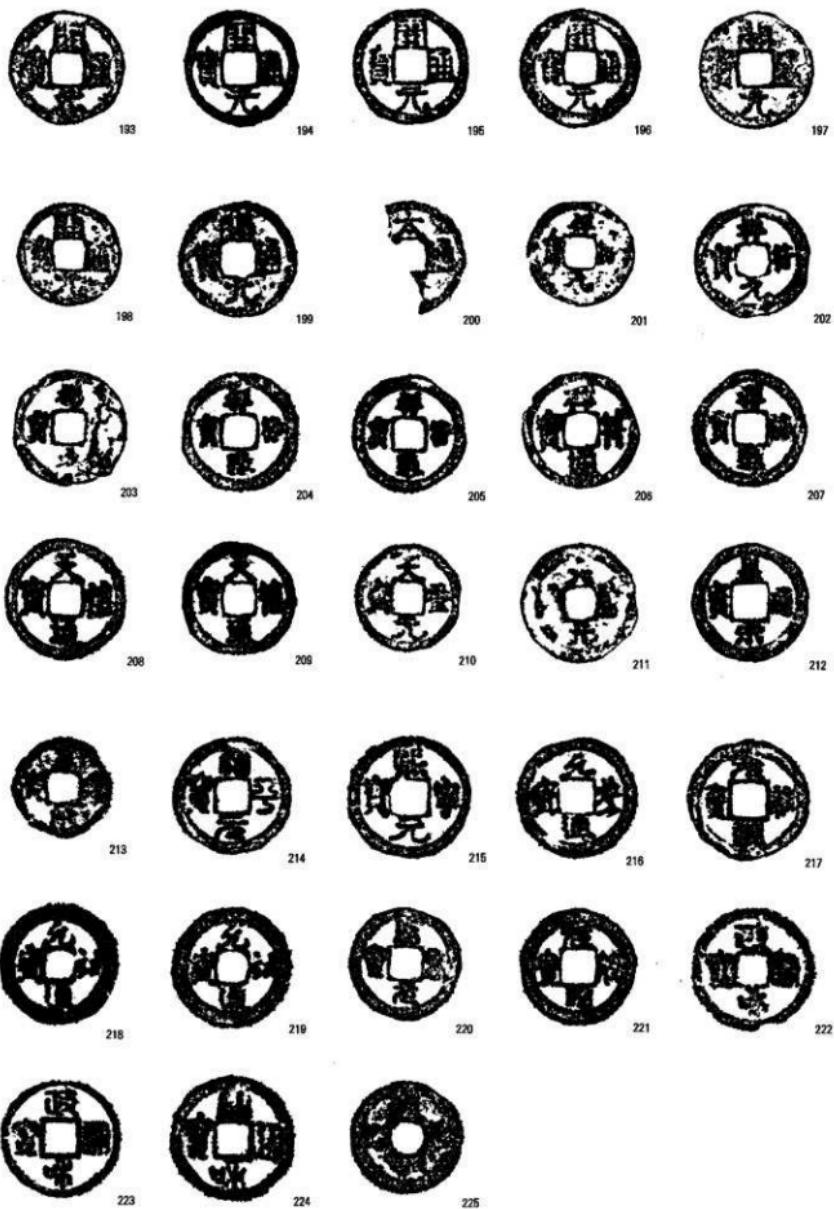
- 196は直径2.4cm、重量は3.5gを測る。
- 197は直径2.4cm、重量は3.2gを測る。
- 198は直径2.1cm、重量は1.55gを測る。
- 199は直径2.4cm、重量は3.45gを測る。
- 200は太平通寶である。直径2.4cmを測るが、半分欠損しているために重量は不明である。初鋤年代は976年である。
- 201～203は祥符元寶で、初鋤年代は1008年である。
- 201は直径2.2cm、重量は1.95gを測る。
- 202は直径2.4cm、重量は2.75gを測る。
- 203は直径2.4cm、重量は3.5gを測る。
- 204～207は祥符通寶で、初鋤年代は1009年である。
- 204は直径2.4cm、重量は3.55gを測る。
- 205は直径2.4cm、重量は2.8gを測る。
- 206は直径2.4cm、重量は2.9gを測る。
- 207は直径2.4cm、重量は3.7gを測る。
- 208・209は天禧通寶で、初鋤年代は1017年である。
- 208は直径2.5cm、重量は3.2gを測る。
- 209は直径2.3cm、重量は3.5gを測る。
- 210・211は天聖元寶で、初鋤年代は1023年である。
- 210は直径2.2cm、重量は2.2gを測る。
- 211は直径2.4cm、重量は2.7gを測る。
- 212・213は皇宋通寶で、初鋤年代は1039年である。
- 212は直径2.5cm、重量は2.25gを測る。
- 213はかなり磨滅しているが、直径2.0cm、重量は1.15gを測る。
- 214は治平元寶で、初鋤年代は1064年である。直径2.4cm、重量は3.45gを測る。
- 215は熙寧元寶で、初鋤年代は1068年である。直径2.5cm、重量は3.35gを測る。
- 216は元豐通寶で、初鋤年代は1078年である。直径2.4cm、重量は3.9gを測る。
- 217～219は元祐通寶で、初鋤年代は1086年である。
- 217は直径2.4cm、重量は2.3gを測る。
- 218は直径2.4cm、重量は3.0gを測る。
- 219は直径2.4cm、重量は2.6gを測る。
- 220は紹聖元寶で、初鋤年代は1094年である。直径2.3cm、重量は4.3gを測る。
- 221は元符通寶で、初鋤年代は1098年である。直径2.4cm、重量は3.35gを測る。
- 222～224は政和通寶で、初鋤年代は1111年である。
- 222は直径2.4cm、重量は2.8gを測る。
- 223は直径2.4cm、重量は3.25gを測る。

224は直径2.5cm、重量は4.2gを測る。

225は磨滅により名は判断できないが、直径2.3cm、重量は2.8gを測る。

註

- ① 鹿島町教育委員会『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5 南講武草田遺跡』1992
- ② ①と同じ
- ③ 奈良国立文化財研究所『木器集成図録 近畿原始編』1993
- ④ ③と同じ
- ⑤ ③と同じ
- ⑥ ③と同じ
- ⑦ ③と同じ
- ⑧ ③と同じ
- ⑨ 島根県土木部河川課・島根県教育委員会『朝鈴川河川改修工事に伴うタテチヨウ遺跡発掘調査報告書-IV-』1992
- ⑩ ③と同じ



第9図 大倉IV遺跡出土の銅銭（1：1）

第4章 綿田原I遺跡の調査

第1節 I区の調査(第1図)

当該調査区は、地形的に標高44mの尾根上から、標高26mの裾部にかけての低丘陵である。肩位的にみてみると、尾根上では表土を剥ぐとすぐに地山が露呈するが、斜面から裾部にかけては、褐色の遺物包含層が広範囲に認められた。

遺構(図版10・35・36)

検出した遺構は段状遺構が2ヶ所、土坑11ヶ所である。段状遺構は斜面の地山面をカットし、テラス面を造り出している。

段状遺構1は北向きの斜面に幅9.2m、奥行き3.2mで地山面を深いところで70cm程度掘り込み面を成している。

段状遺構2は段状遺構1と比べ、やや小さく、西向きの斜面に幅6.4m、奥行き2mで、深さ30cm程度地山面をカットしてテラス面を削り出している。

段状遺構1・2ともにテラス面にピットなどは認められず、埋土より古墳時代後期頃の所産と思われる土師器、須恵器が出土している。

土坑はその大半がいわゆる焼成土坑である。

SK 01は裾部で検出された。プランは径90cmの円形で、深さは約20cmを測る。埋土は灰色の砂質土で、最深部では炭化物の層を確認した。また、埋土中から鉄片が出土したが、時期、性格は明らかではない。

SK 02は尾根上で検出された。長辺90cm、短辺50cmの長方形で深さは15cmを測り、埋土より土師器が極少量と鉄製品の破片が出土したが、いずれも細片のために時期は不明である。

SK 03は裾部で検出された。長径80cm、短径68cmの楕円形で深さは約10cmを測る。

SK 04は裾部で検出された。長径82cm、短径70cmの楕円形で深さは約10cmを測る。

SK 05は裾部で検出された。長径110cm、短径90cmの楕円形で深さは約15cmを測る。

SK 06は斜面で検出された。長径74cm、短径62cmの楕円形で深さは約10cmを測る。

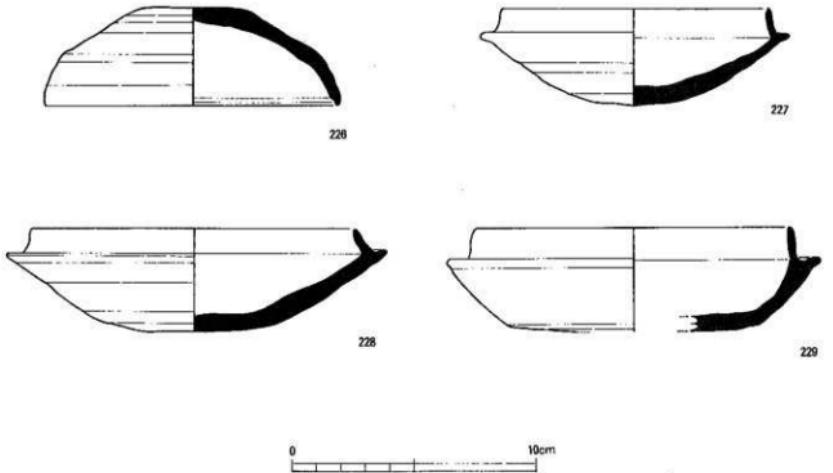
SK 07は斜面中腹のやや平坦な面で検出された。長径72cm、短径66cmの楕円形で深さは約15cmを測り、埋土より土師器が少量出土した。

SK 08は裾部の段状遺構2北側で検出された。長径100cm、短辺72cmの方形で深さは約20cmを測る。

SK 09は裾部で検出された。長辺60cm、短辺50cmの楕円形で深さは約5cmを測る。

SK 10は裾部で検出された。長辺80cm、短辺68cmの方形に近い楕円形で深さは約30cmを測る。

SK 11は尾根上で検出された。長辺68cm、短辺50cmの方形に近い楕円形で深さは約10cmを測る。



第10図 締田原I遺跡I区出土の土器

遺物（図版59、第10図）

遺物は上師器、須恵器、鉄製品、石製品などが検出された。

226は須恵器の蓋である。口径は12.0cmを測り、天井部は平らで、口縁部にむけて比較的直線的に下がる。口縁端部は細く、口唇内面に段を有する。調整は天井部外面が回転ヘラケズリのうちにナデ、その他は回転ナデである。焼成は良好で内外面ともに青灰色を呈する。段状造構2より出土した。

227・228・229は須恵器の杯である。

227は口径11.0cmを測り、たちあがりは内傾してのび、比較的高い。受部はほぼ水平にのび、短い。焼成は良好で内外面ともに青灰色を呈する。段状造構2より出土した。

228は口径13.0cmを測り、たちあがりは内傾してのび、受部はやや上方へのびる。焼成は良好で内外面ともに灰色を呈する。段状造構2より出土した。

229は口径13.2cmを測り、たちあがりはほぼ垂直にのび、受部は上向きにのびる。底部は比較的平らで、焼成は良好、内外面ともに灰色を呈する。段状造構2より出土した。

第5章 まとめ

3ヵ年度におよぶ長期にわたった今回の調査は、ここ近年当町で例を見ないほどの面積的にかなりまとまった規模の調査を実施することができ、なかでも大倉IV遺跡においては、出雲国風土記が編纂された頃の集落の様相を知る上で、非常に大きな成果を上げることができた。以下この成績を調査区ごとに簡単にまとめておきたい。

大倉IV遺跡I区では、古墳時代前期から平安時代頃までの間に位置づけされそうな建物が竪穴住居を含めて16棟検出された。特に桁行7間、梁行6間の規模をもつSB08は自然流路とSD03、SD04に囲まれた範囲の中心部に位置し、他の建物に比べると規模が大きく、時期や建物の性格など、今後、慎重に検討する必要があると思われる。また、自然流路とSX02より山上した3点の火葬臼は町内遺跡からの初めての山上例となる。

II区においては骨片が検出されたことによって土坑墓と考えられるSK02から、木棺に使われたものと思われる鉄釘が多数出土した。土坑自体は今回の調査でII区以外でも数多く認められたが、土坑墓である可能性がきわめて強いものはこの一つだけである。

III区については、特に際立った遺構、遺物は認められなかったが、谷筋に沿って確認された谷地形あるいは流路の埋土より奈良・平安時代以降の上器だけ山上しているということから、この頃には大倉谷の隅々まで生活域が拡がっていたものと思われる。また、流れ込みによるものとすれば、周辺に何らかの施設が存在した可能性も考えられる。

IV区では、谷地形の下層より、草田編年の6期、7期頃に位置づけされる土器とともに鍼など数多くの木製品が出土した。これらも町内遺跡からの初めての出土例で、その当時の農具を含めた「木の文化」を知る手がかりとして、貴重な資料になるものと思われる。また、祭祀的要素をもつ手づくね七器の山上によって、この谷地形の性格を再検討していく必要があると思われる。

綿田原I遺跡I区は住居址が確認されていないことと出土した土器の量から判断すれば、決して日常の居住空間ではないと思われる。調査区内11ヶ所で確認された土坑のなかで、遺構内に遺物が認められたものは、SK01、SK02、SK07のわずか3ヶ所であり、鉄片や土師器が検出された。しかし、どれも細片で上坑の性格や時期などを判断する材料としてはきわめて弱いものである。調査区内の2ヶ所で検出された段状遺構については、埋土から古墳時代後期頃の所産と考えられる須恵器が山上したことにより、おおむね、この時期のものと推測される。性格としては、周辺から山上した遺物で判断すると、工具として用いたと思われる鉄製品や石製品から、生産に関連する遺構と考えられる。また、遺構内で検出された遺物の出土状況からみると、祭祀的な性質をもった遺構とも考えられるが、双方いずれかの明確な判断はしがたい。

今回の調査によって、大倉谷に存在した集落の中心部が確認され、ここを拠点に生活が営まれていたものと考えられる。さらに、尾根上に点在する痕跡から人々の生活は、谷をとり囲む尾根部にまで拡がりを見せており、多くのデータが得られた。しかし、これらの遺跡をよりリアルに復元するため、さらにそこから、歴史を解明するためには、いっそうマクロな視野で遺跡をとらえる必要がある。今後、周辺の調査を含めた、さらなる調査研究による情報の蓄積を期待したいと思う。

第2表 文化財一覧表

遺跡番号	名 称	遺跡番号	名 称	遺跡番号	名 称
1	平野Ⅰ遺跡	36	上学頭古墳群	71	石橋古墳群
2	軍原古墳	37	軍原千人塚古墳	72	堀切古墳群
3	軍原丘上古墳群	38	鍛冶屋横穴	73	堀切Ⅰ遺跡
4	大井城跡	39	西光院横古墳	74	堀切Ⅱ遺跡
5	大倉横穴群	40	武部西古墳群	75	堀切Ⅲ遺跡
6	小丸子山古墳	41	結城古墳	76	新屋敷古墳
7	大井古墳	42	貴船古墳	77	新市Ⅰ遺跡
8	神庭岩船山古墳	43	コモゴ山横穴群	78	新市横穴群
9	神庭古墳群	44	後谷古墳	79	斐川公園内古墳群
10	岩野原古墳群	45	登道古墳	80	平野Ⅱ遺跡
11	剣山横穴群	46	稻城横穴	81	神守古墳群
12	外ヶ市古墳	47	御射山横穴群	82	水室Ⅰ遺跡
13	出西小丸古墳群	48	龜山横穴	83	水室Ⅱ遺跡
14	岩野原横穴群	49	後谷東古墳群	84	神水古墳群
15	稻城古墳群	50	武部東古墳	85	神守Ⅰ遺跡
16	山ノ奥横穴群	51	白塚古墳	86	和西Ⅰ遺跡
17	海の平横穴群	52	水越古墳	87	城山東古墳群
18	八幡宮横穴	53	城平山城跡	88	外ヶ市Ⅰ遺跡
19	岩極上横穴	54	城山古墳群	89	神守Ⅱ遺跡
20	岩海横穴群	55	平野古墳群	90	新在古墳
21	岩海古墳	56	三井古墳	91	長者原古墳群
22	高野古墳群	57	結遺跡	92	上出西Ⅰ遺跡
23	武部遺跡	58	西光院裏古墳群	93	上出西Ⅱ遺跡
24	武部西遺跡	59	結西谷Ⅰ遺跡	94	剣先横穴群
25	布子谷古墳	60	結西谷Ⅱ遺跡	95	後谷横穴群
26	横手古墳	61	直江石橋Ⅰ遺跡	96	後谷Ⅰ遺跡
27	下阿宮古墳	62	結西谷古墳群	97	後谷Ⅱ遺跡
28	阿宮公民館後古墳	63	西古墳群	98	後谷Ⅲ遺跡
29	墓田横穴群	64	欠ノ元城跡	99	後谷Ⅳ遺跡
30	高瀬城跡	65	湯谷城跡	100	神水三メ田古墳群
31	狼山城跡	66	中前古墳	101	中出西Ⅰ遺跡
32	出西・伊波野一里塚	67	結本谷Ⅰ遺跡	102	山ノ奥Ⅰ遺跡
33	沢田横穴群	68	結本谷Ⅱ遺跡	103	沢田Ⅰ遺跡
34	出西岩橋跡	69	西中学校横遺跡	104	下阿宮Ⅰ遺跡
35	御射山古墳群	70	本谷遺跡	105	下阿宮Ⅱ遺跡

第2表 文化財一覧表

遺跡番号	名 称	遺跡番号	名 称	遺跡番号	名 称
106	立栗山城跡	137	岡瓦窯跡	172	西谷Ⅱ遺跡
107	後谷町道脇古墳	138	岡田瓦窯跡	173	亀山城跡
108	吉成古墳群	139	平野横穴群	174	神守城跡
109	貴船Ⅰ遺跡	140	新市Ⅱ遺跡	175	堀切瓦出土地
110	古殿古墳群	141	新市Ⅲ遺跡	176	欠ノ元Ⅰ号墳
111	奥古墳	142	福富遺跡	177	大倉城跡
112	佐利保谷遺跡	143	水室Ⅳ遺跡	178	宇屋谷城跡
113	神庭西谷古墳群	144	三絡Ⅰ遺跡	179	宇屋谷Ⅱ遺跡
114	諏訪神社前遺跡	145	三絡Ⅱ遺跡	180	神庭谷Ⅲ遺跡
115	宇屋谷遺跡	146	三絡Ⅲ遺跡	181	尾田瀬Ⅱ遺跡
116	水室Ⅲ遺跡	147	三絡Ⅳ遺跡	182	三絡Ⅶ遺跡
117	神庭西谷Ⅰ遺跡	148	三絡Ⅴ遺跡	183	三絡Ⅸ遺跡
118	神庭西谷Ⅱ遺跡	149	三絡Ⅵ遺跡	184	奥遺跡
119	斐伊川鉄橋遺跡	150	三絡Ⅷ遺跡	185	三絡Ⅹ遺跡
120	神庭谷Ⅰ遺跡	151	結西谷Ⅲ遺跡	186	三絡Ⅺ遺跡
121	神庭谷Ⅱ遺跡	152	軍原Ⅰ遺跡	187	紙園原遺跡
122	西谷古墳群	153	八斗蔵Ⅰ遺跡	188	結本谷Ⅲ遺跡
123	西谷遺跡	154	八斗蔵Ⅱ遺跡	189	結城跡
124	荒神谷遺跡	155	田中古墳群	190	和西Ⅱ遺跡
125	神庭丘陵北遺跡	156	天寺平魔寺	191	小野遺跡
-1	御射山地区	157	三角点古墳	192	押屋古墳群
-2	岡地区	158	稻城丘陵古墳群	193	後谷丘陵古墳群
-3	中溝地区Ⅰ	159	城山城跡	194	中出西Ⅱ遺跡
-4	中溝地区Ⅱ	160	狼土山師器出土地	195	海の平遺跡
126	上学頭Ⅰ遺跡	161	鷹の巣城跡	196	郡家(長者原)推定地
127	上学頭Ⅱ遺跡	162	尾田瀬遺跡	197	後谷Ⅴ遺跡
128	大倉Ⅰ遺跡	163	佐利保谷Ⅱ遺跡	198	稻城遺跡
129	大倉Ⅱ遺跡	164	結南遺跡	199	上阿宮Ⅰ遺跡
130	大倉Ⅲ遺跡	165	直江石橋Ⅱ遺跡	200	上阿宮Ⅱ遺跡
131	大倉Ⅳ遺跡	166	有馬谷遺跡		
132	綿田原Ⅰ遺跡	167	有馬谷Ⅱ遺跡		
133	綿田原城跡	168	三井Ⅰ遺跡		
134	綿田原古墳群	169	門原池遺物散布地		
135	三分市館跡	170	西谷池遺物散布地		
136	寿山窯跡	171	三斗蔵遺跡		

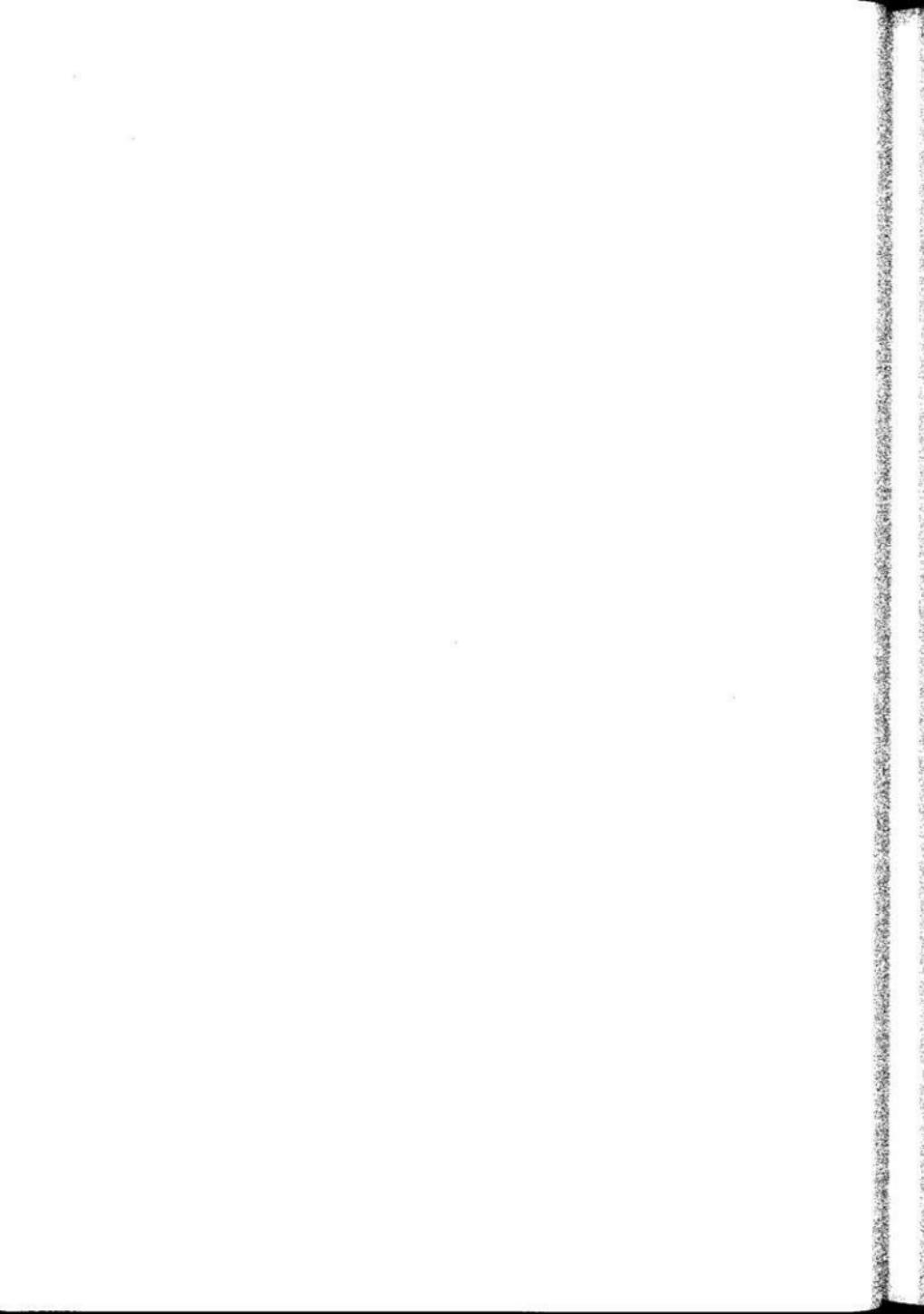
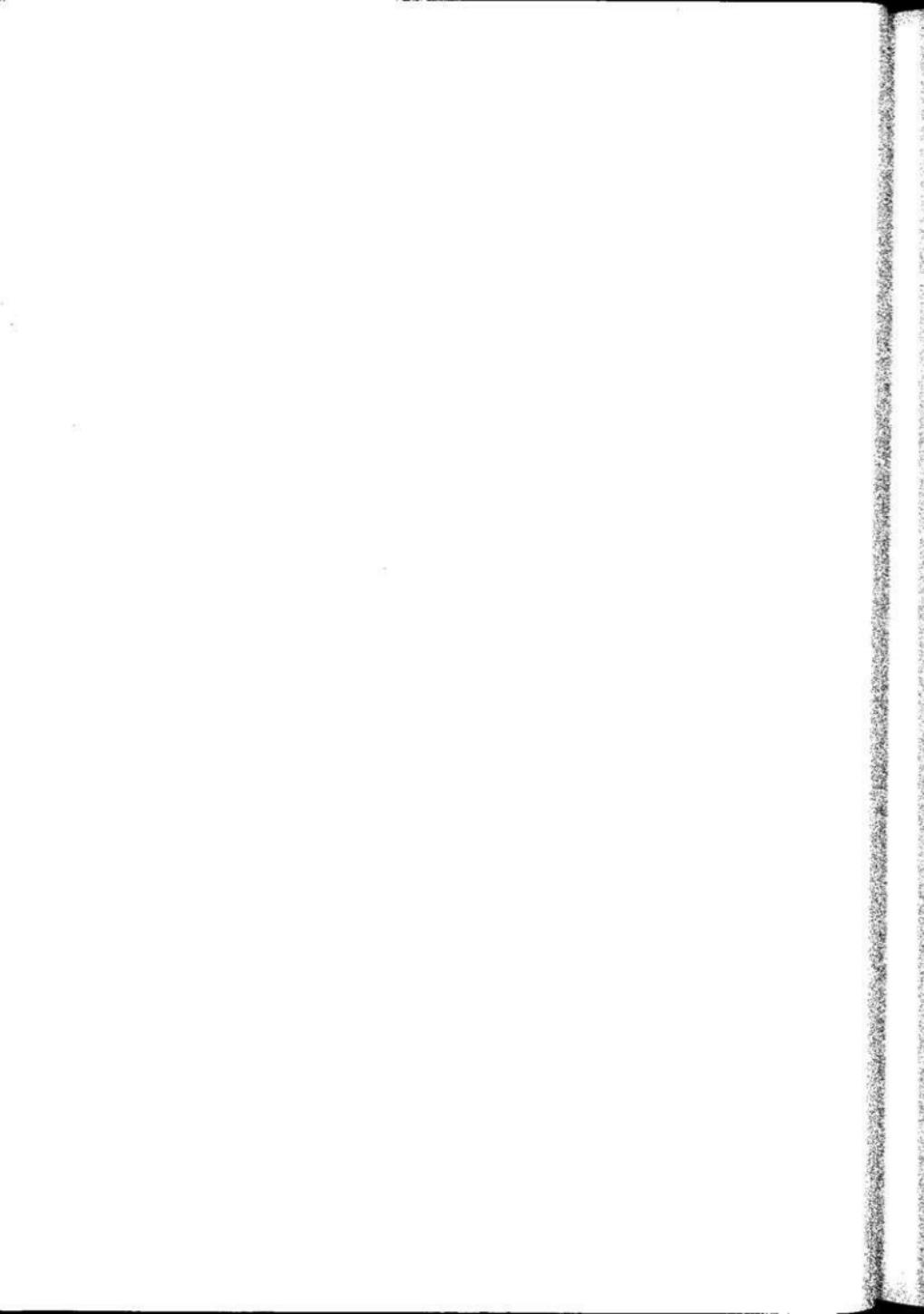
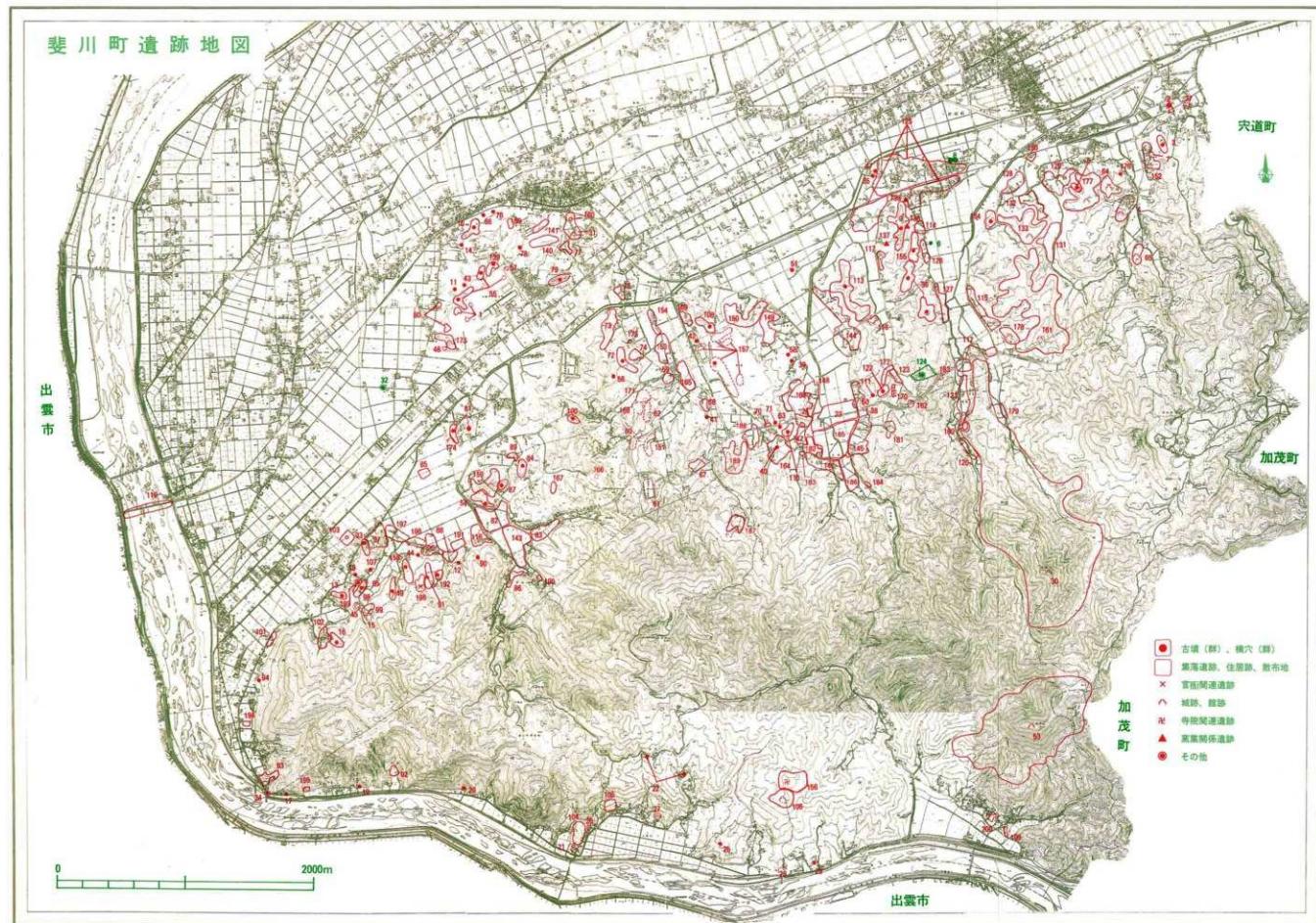


図 版



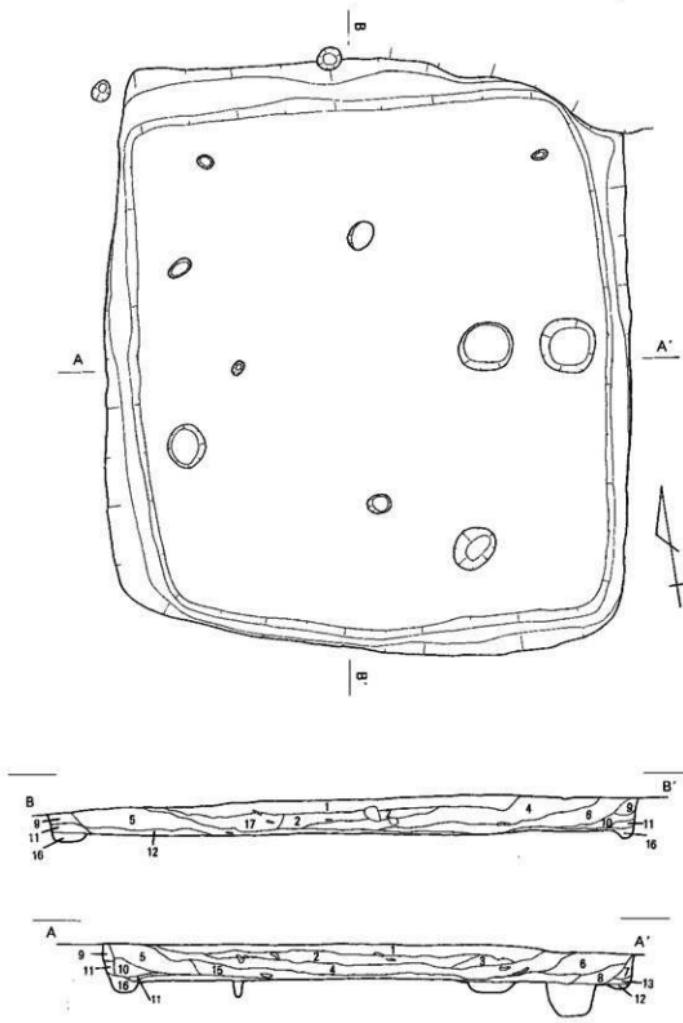
図版1 萩川町の文化財



図版2 大倉N遺跡I区平面図



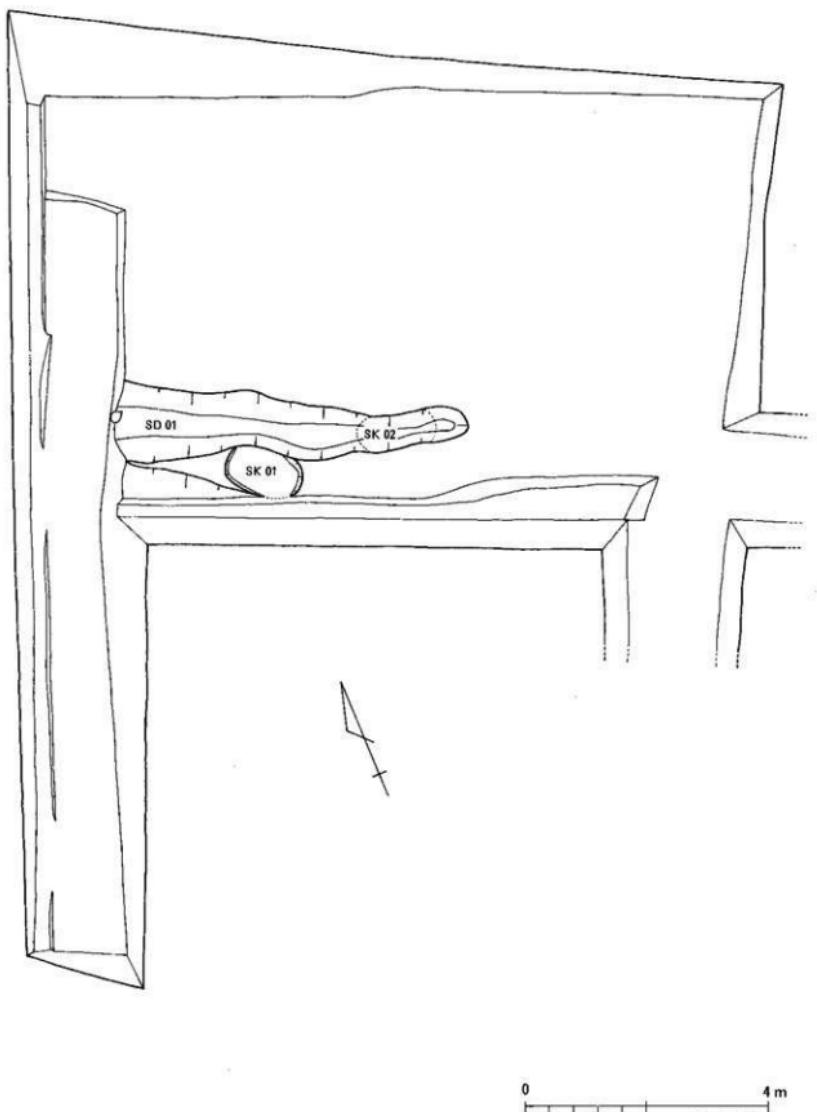
図版3 大倉N遺跡I区SB01平面図・断面図



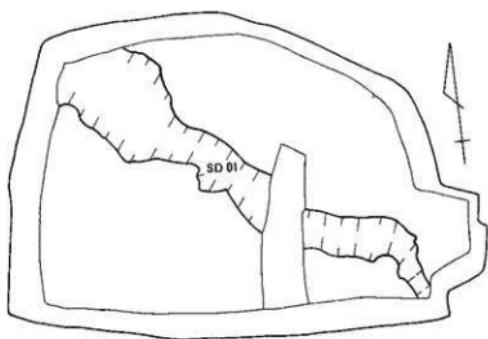
1. にぶい灰色粘質土(炭化物、鉄分を少量含む)
 2. にぶい灰色シルト(黄褐色粘質土をブロック状に含む。炭化物・鉄分を少量含む)
 3. にぶい黄褐色シルト(黄褐色粘質土をブロック状に含む。炭化物・鉄分を少量含む)
 4. 黄褐色シルト(黄褐色粘質土をブロック状に含む。炭化物を多量、鉄分を少量含む)
 5. 黄褐色粘質土(黄褐色粘質土をブロック状に多量に含む。炭化物を少量、鉄分を多量に含む)
 6. にぶい灰褐色粘質土(黄褐色粘質土をブロック状に多量に含む。炭化物・鉄分を多量に含む)
 7. にぶい黄褐色シルト(黄褐色粘質土をブロック状に多量に含む。炭化物・鉄分を多量に含む)
 8. にぶい灰褐色粘質土(黄褐色粘質土をブロック状に多量に含む。炭化物・鉄分を多量に含む)
 9. にぶい灰褐色シルト(黄褐色粘質土をブロック状に多量に含む。炭化物・鉄分を多量に含む)
 10. 黄褐色シルト(黄褐色粘質土をブロック状に多量に含む。炭化物・鉄分を多量に含む)
 11. にぶい黄褐色粘質土(黄褐色粘質土をブロック状に多量に含む。炭化物・鉄分を多量に含む)
 12. にぶい灰褐色粘質土(黄褐色粘質土をブロック状に多量に含む。炭化物・鉄分を多量に含む)
 13. にぶい灰褐色粘質土(黄褐色粘質土をブロック状に多量に含む。炭化物・鉄分を多量に含む)
 14. にぶい灰褐色シルト(黄褐色粘質土をブロック状に多量に含む。炭化物・鉄分を多量に含む)
 15. 黄褐色シルト(黄褐色粘質土をブロック状に多量に含む。炭化物・鉄分を多量に含む)
 16. 流灰褐色粘質土(黄褐色粘質土をブロック状に含む。炭化物・鉄分を多量に含む)
 17. 雜灰色シルト(黄褐色粘質土をブロック状に含む。炭化物・鉄分を多量に含む)

0 2m

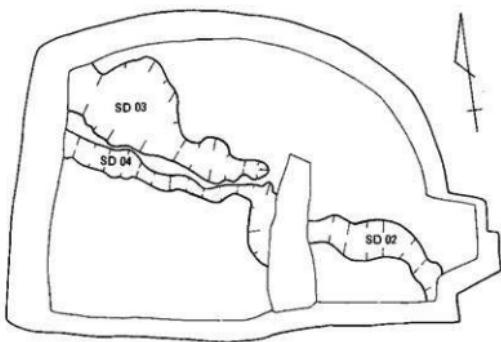
図版4 大倉N遺跡II区平面図



図版5 大倉N遺跡Ⅲ区A地区平面図



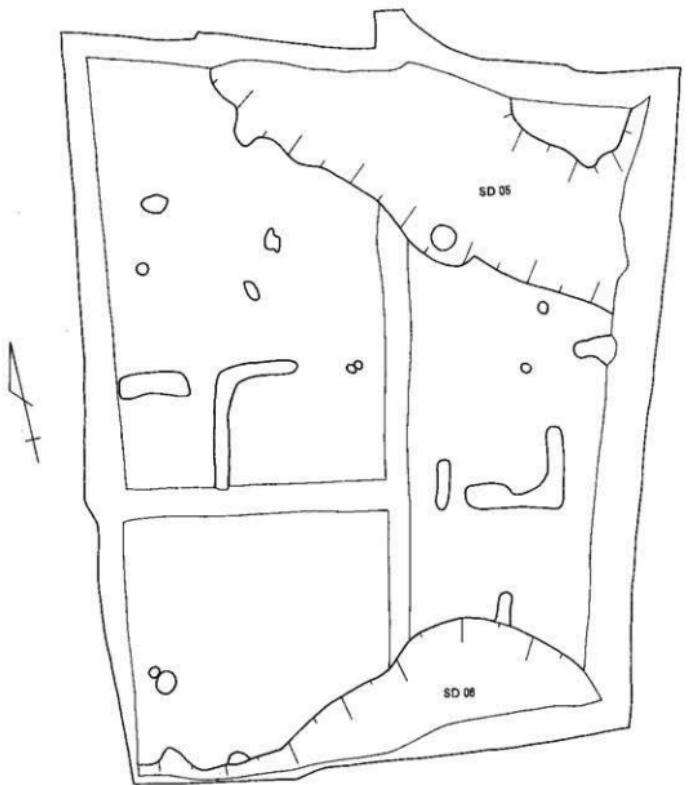
第Ⅰ面



第Ⅱ面

0 10m

図版6 大倉IV遺跡Ⅲ区B地区平面図

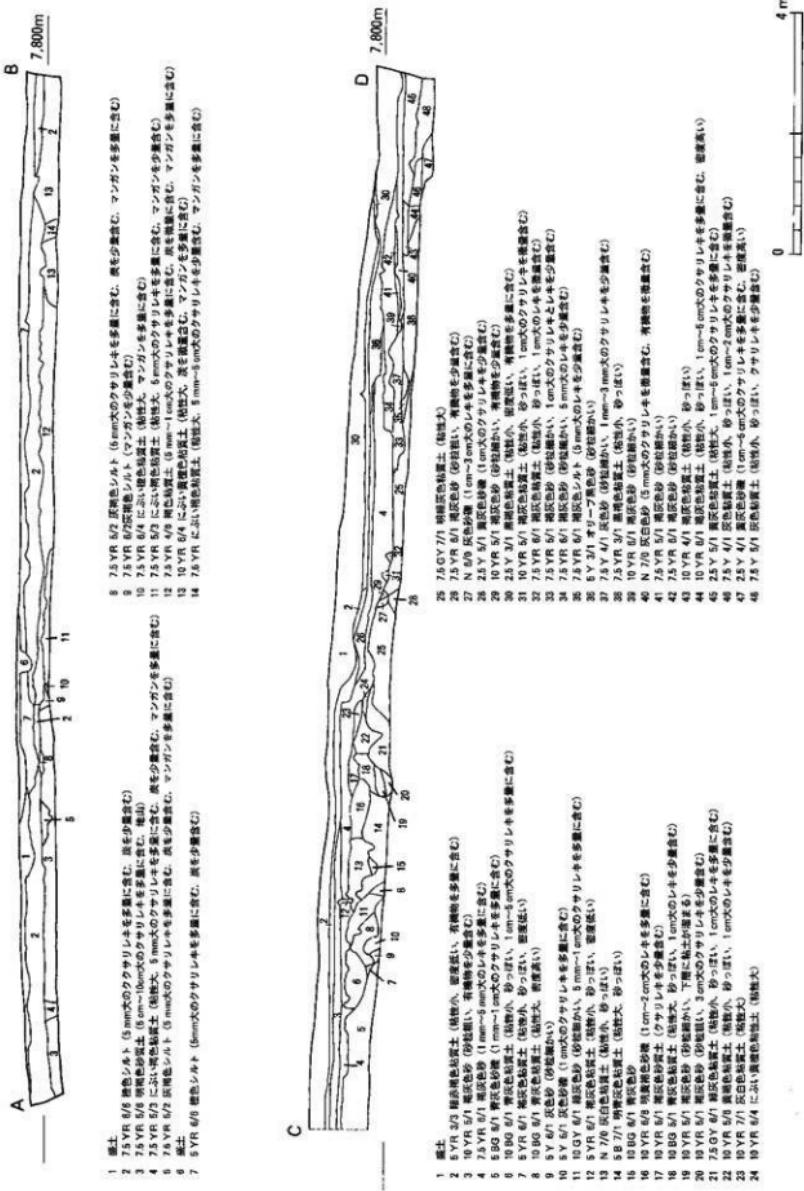


0 5 m

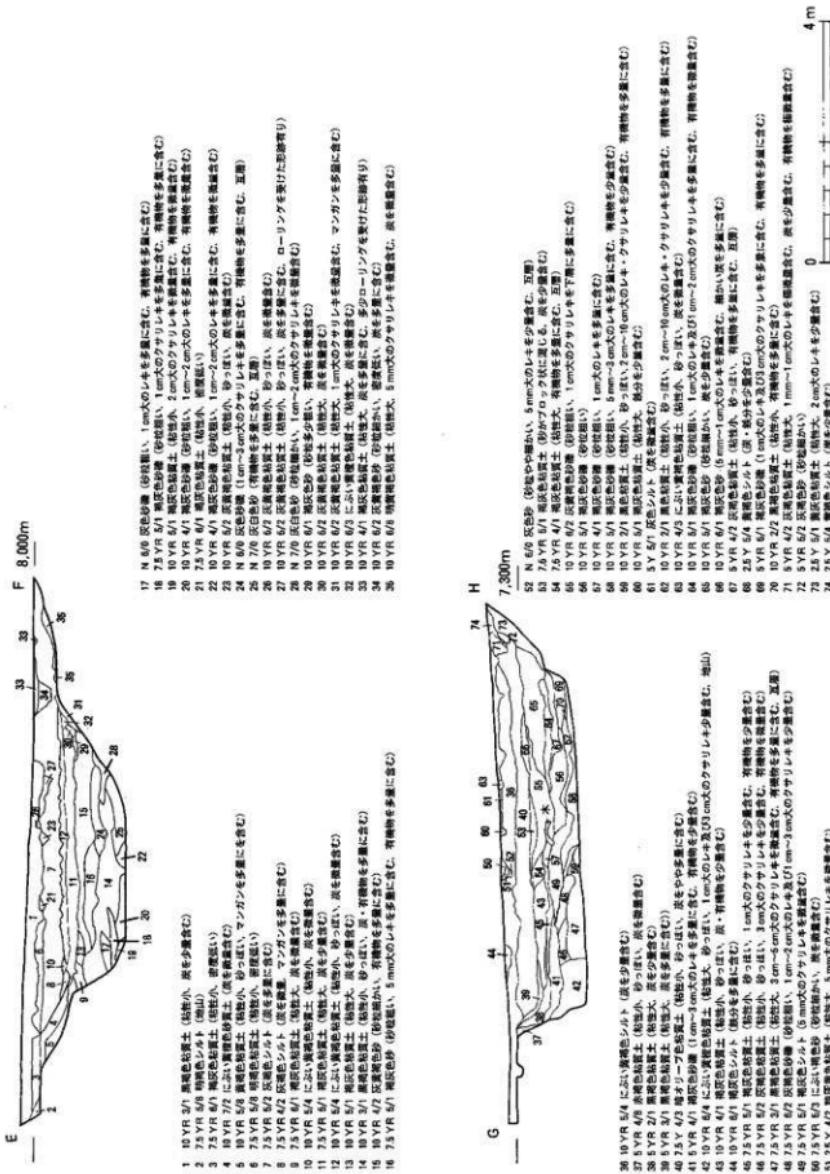
図版7 大倉N遺跡N区平面図



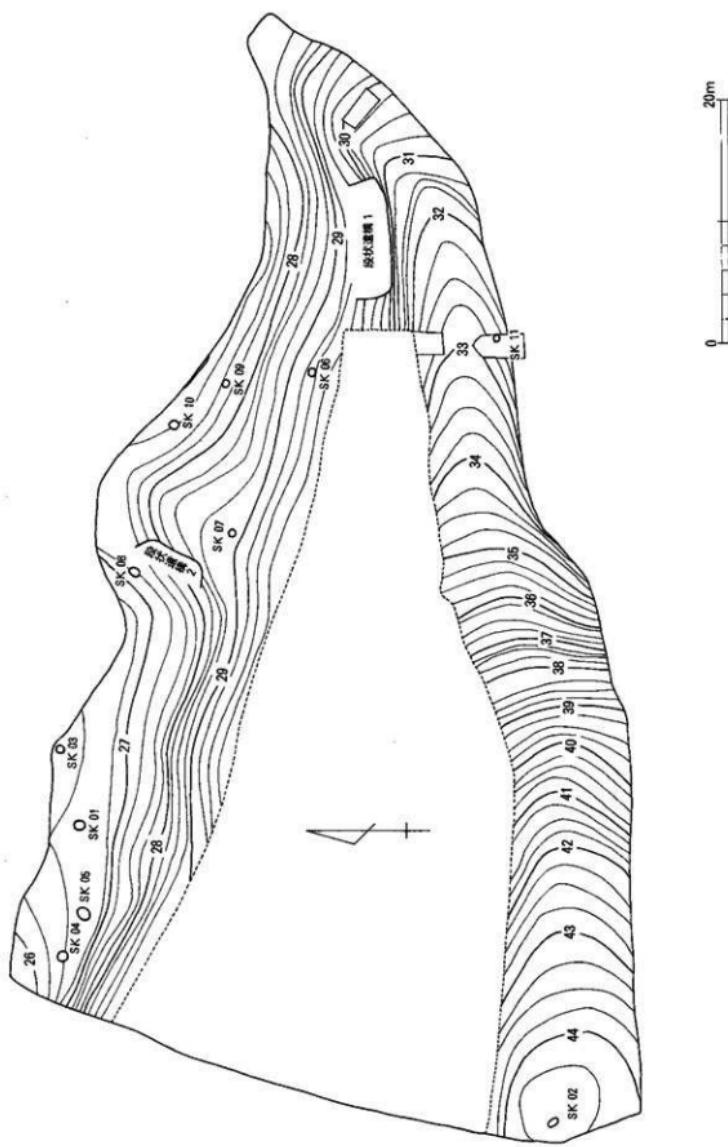
図版8 大倉N遺跡N区断面図



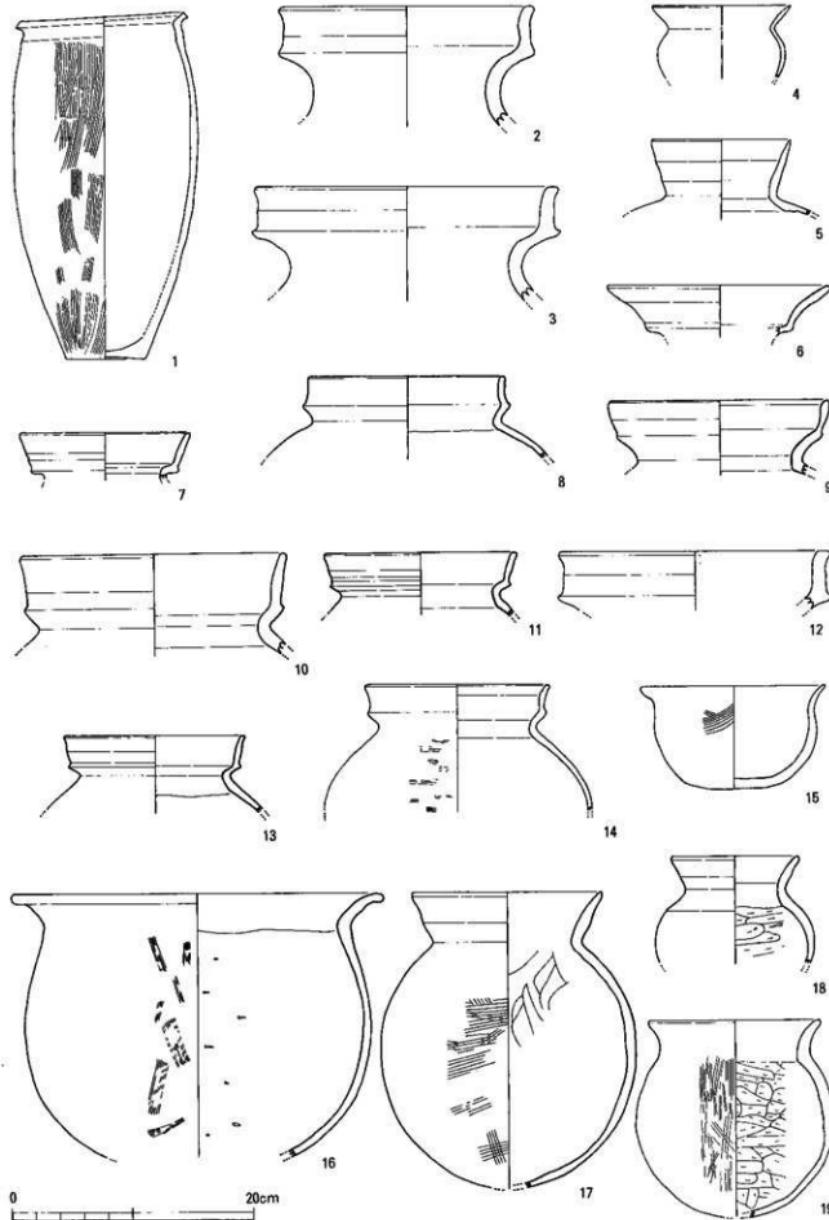
図版9 大倉N遺跡N区谷地形断面図



図版10 緋田原I遺跡I区平面図



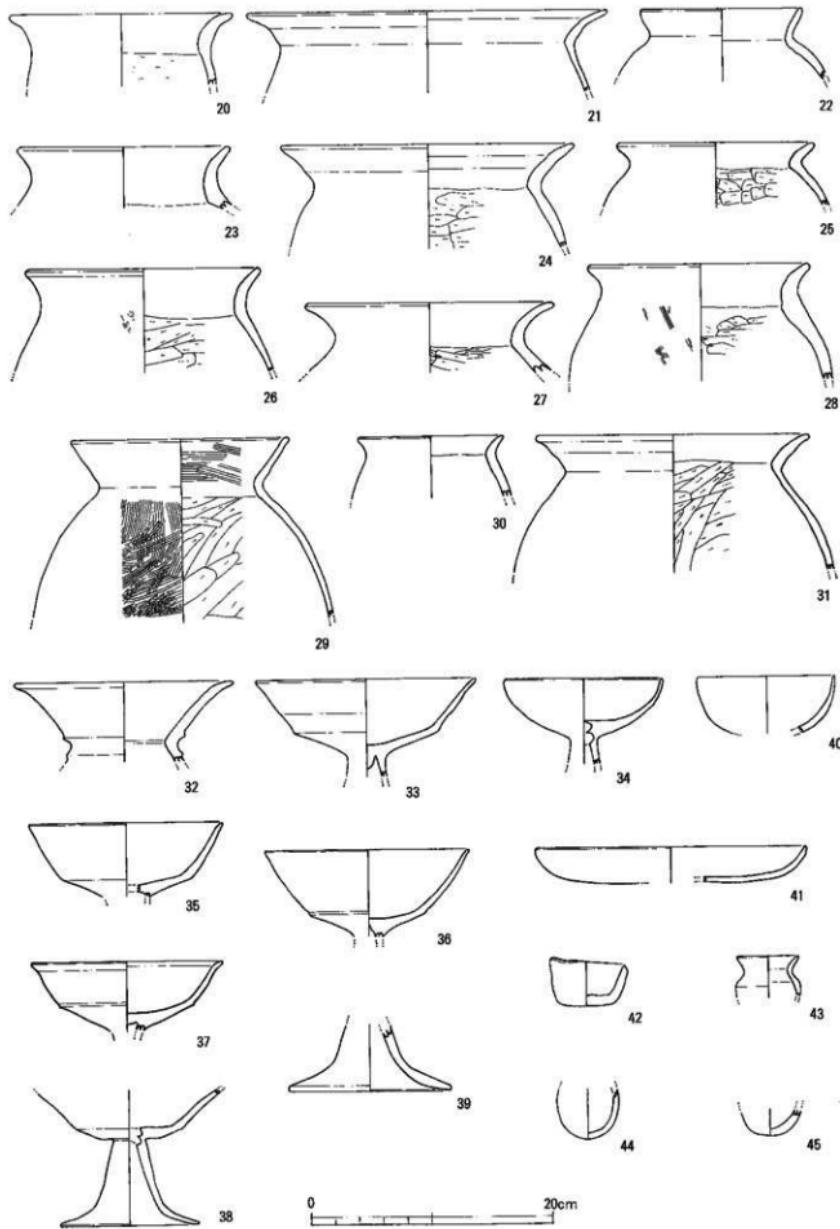
図版11 大倉N遺跡I区出土の土器①



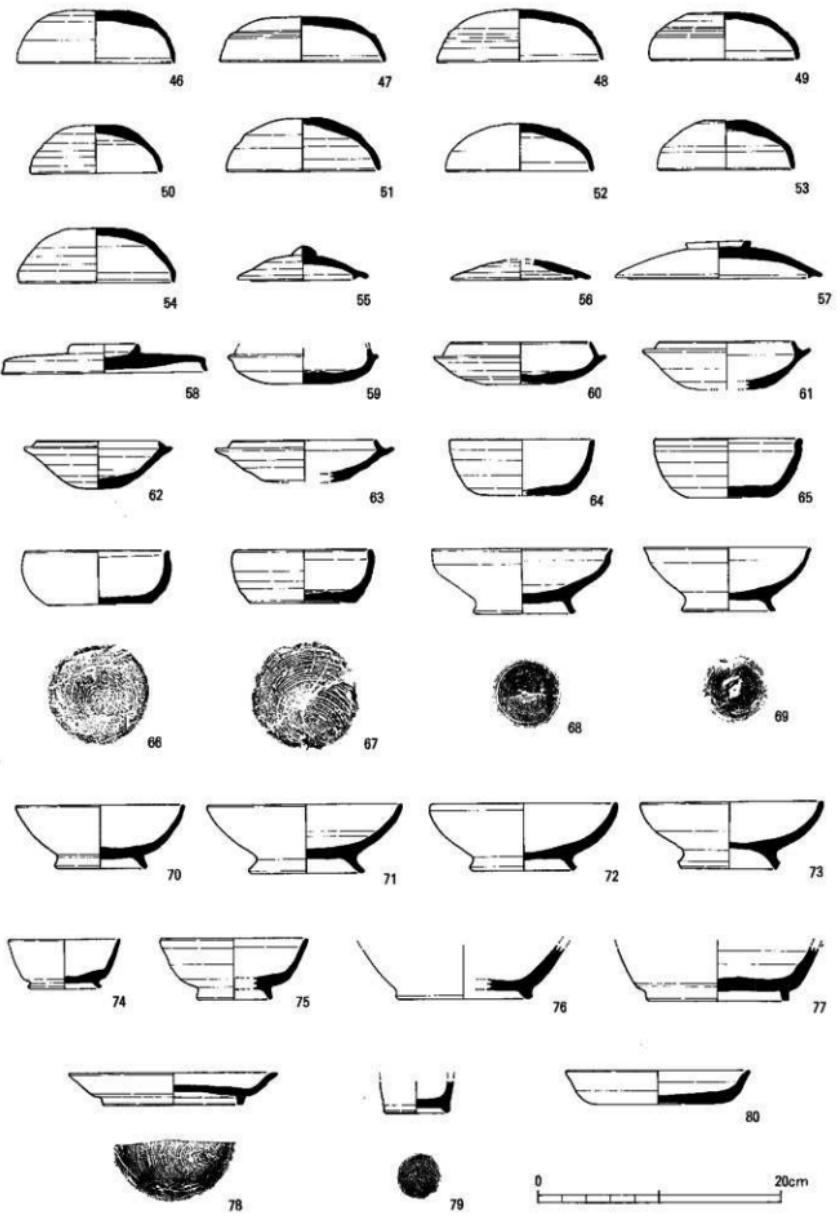
0

20cm

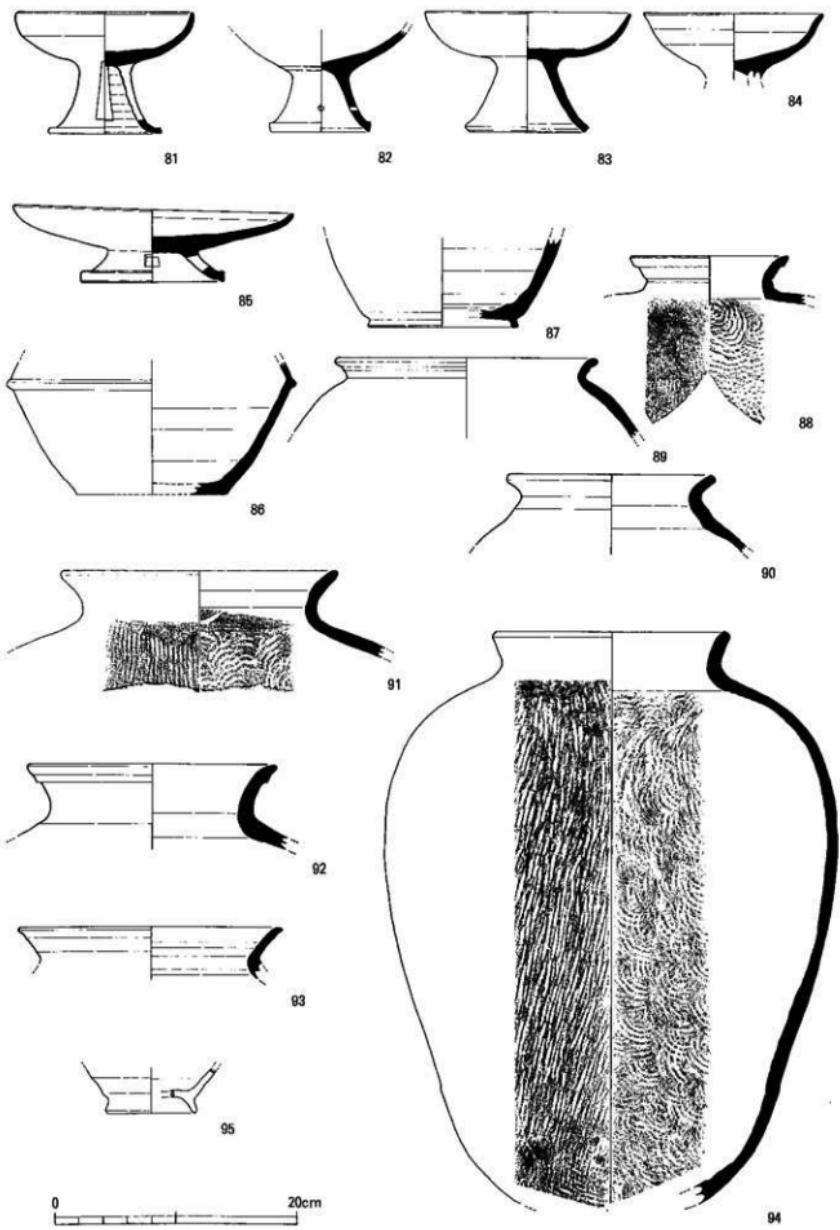
図版12 大倉N遺跡I区出土の土器②



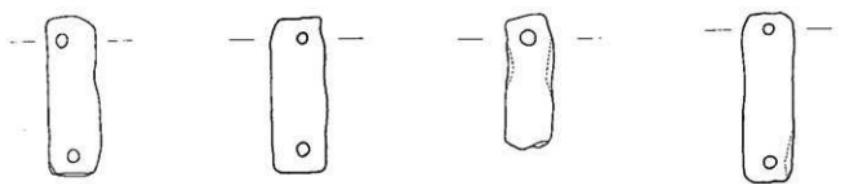
図版13 大倉IV遺跡I区出土の土器③



図版14 大倉IV遺跡I区出土の土器④



図版15 大倉N遺跡I区出土の土製品・石製品



96



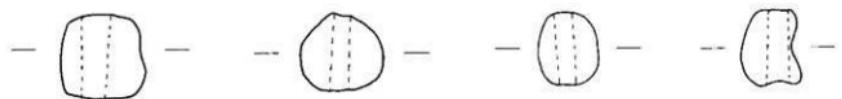
97



98



99



100



101



102



103



105

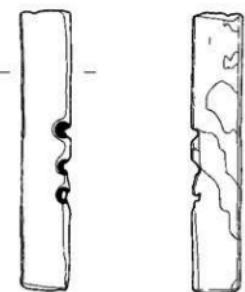


104

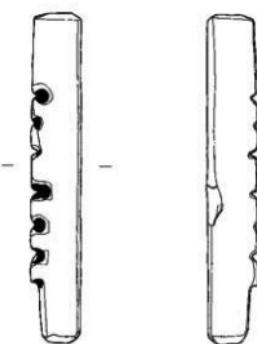


10cm

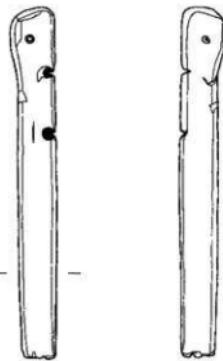
図版16 大倉N遺跡I区出土の木製品



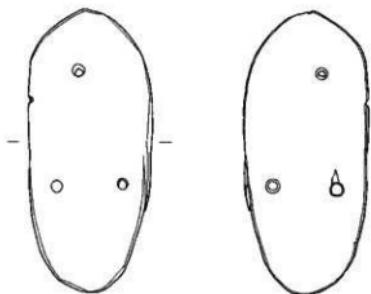
109



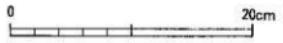
110



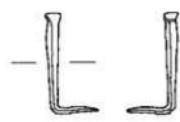
111



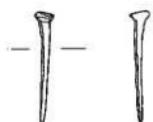
112



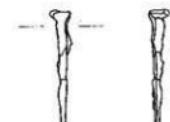
図版17 大倉N遺跡Ⅱ区出土の鉄製品



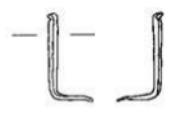
114



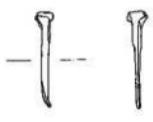
115



116



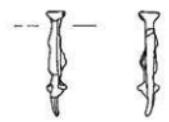
117



118



119



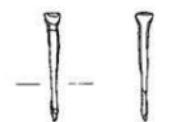
120



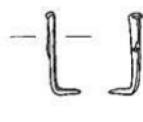
121



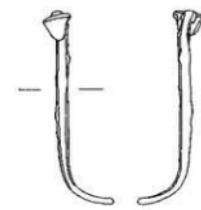
122



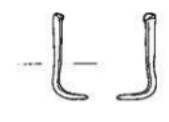
123



124



127



125



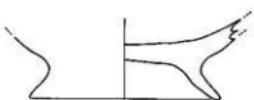
126

0 10cm

図版18 大倉Ⅵ遺跡Ⅲ区出土の土器①



128



129



130



131



132



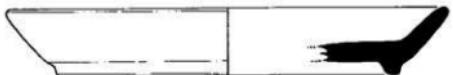
133



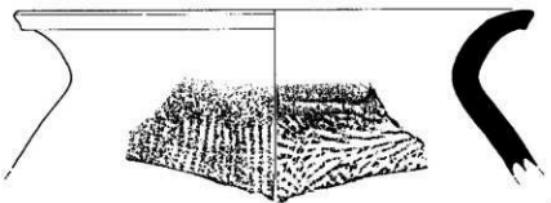
134



図版19 大倉N遺跡Ⅲ区出土の土器②



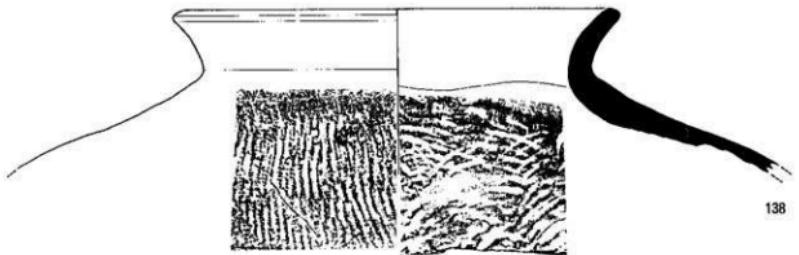
135



136



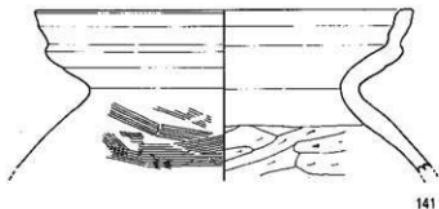
137



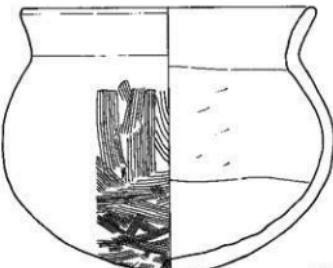
138



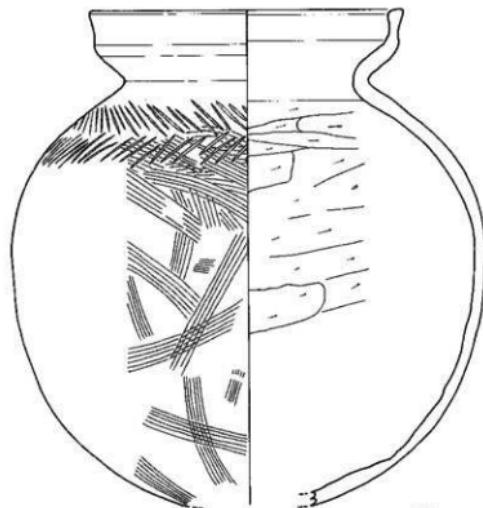
図版20 大倉N遺跡N区出土の土器①



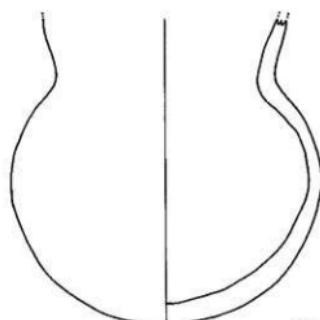
141



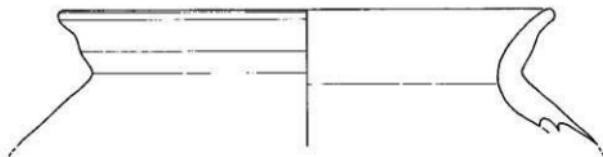
139



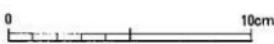
142



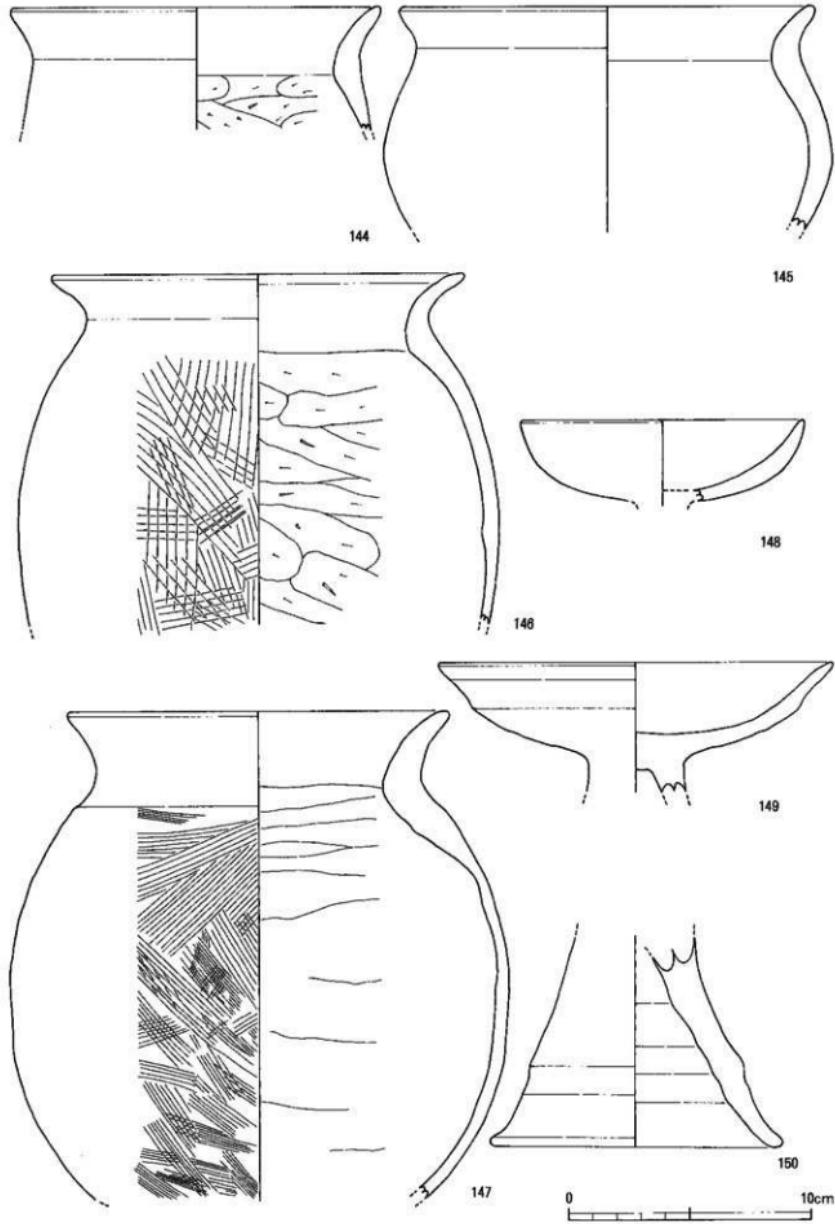
140



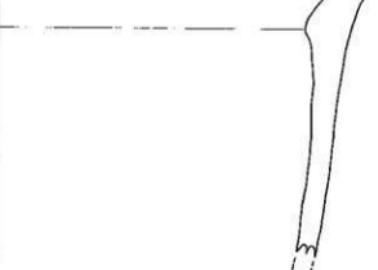
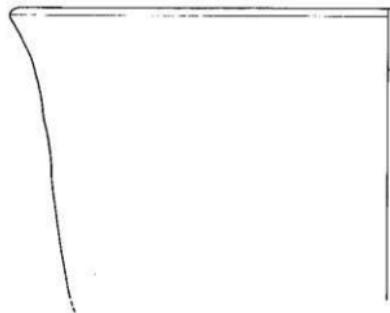
143



図版21 大倉N遺跡N区出土の土器②



図版22 大倉N遺跡N区出土の土器③



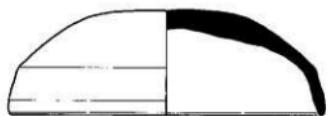
151



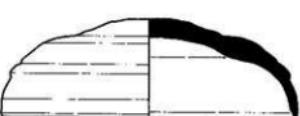
152



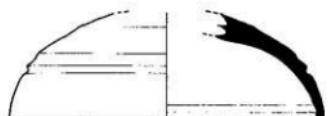
153



154



155



156



157



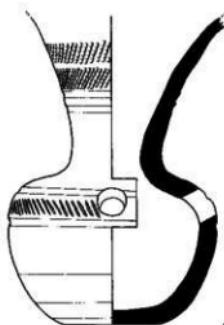
158



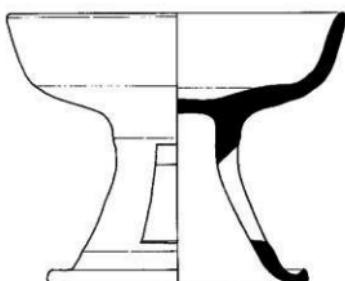
159



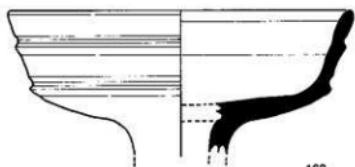
図版23 大倉N遺跡N区出土の土器④



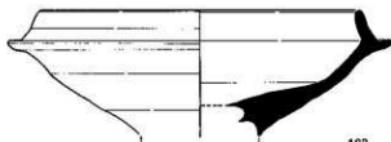
160



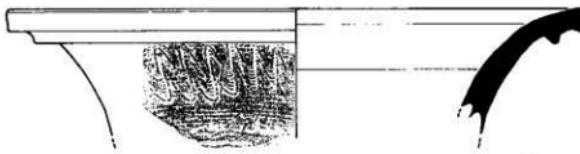
161



162



163



164



図版24 大倉N遺跡N区出土の土器⑤



165



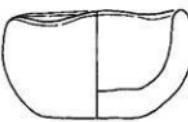
166



167



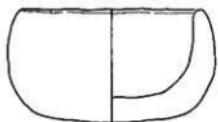
168



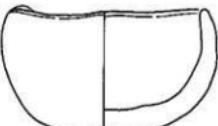
169



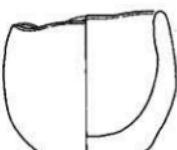
170



171



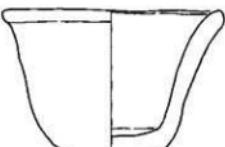
172



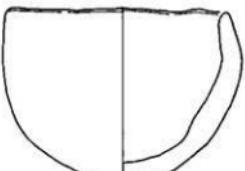
173



174



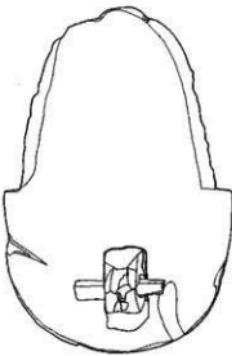
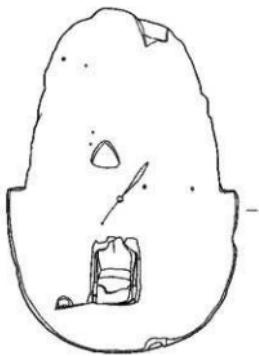
175



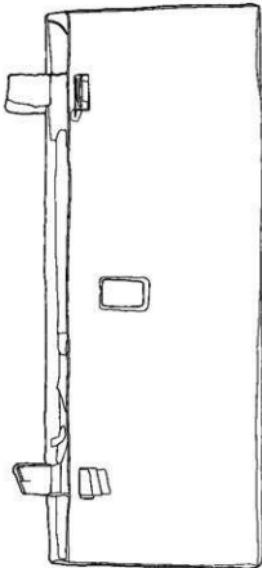
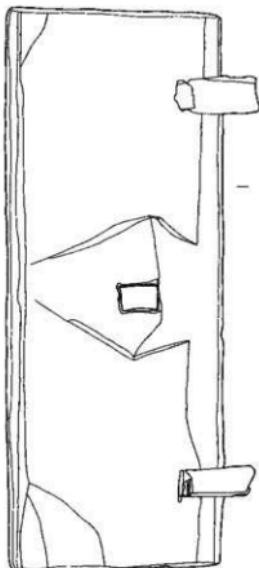
176

0 10cm

図版25 大倉N遺跡IV区出土の木製品①



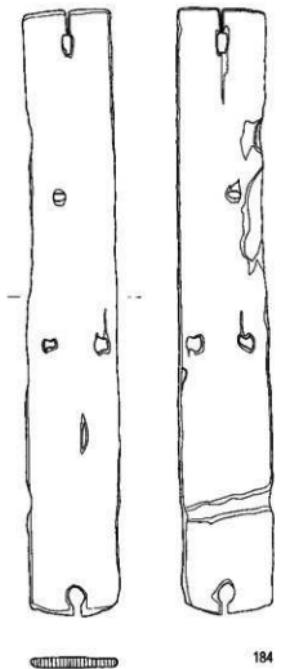
182



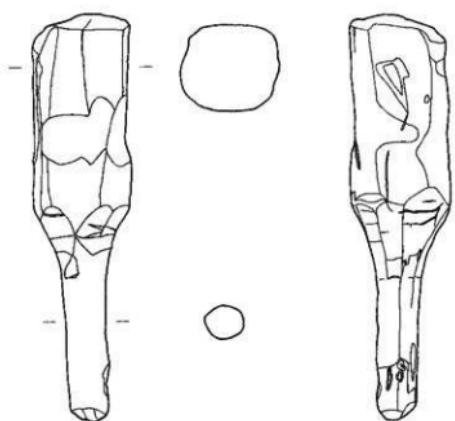
183



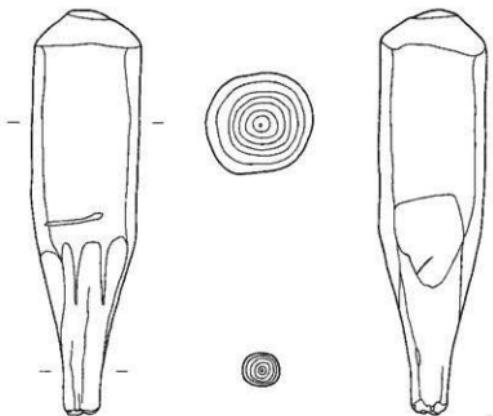
図版26 大倉N遺跡N区出土の木製品②



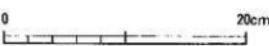
184



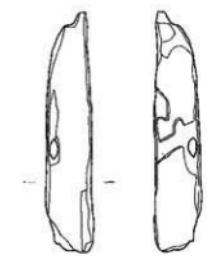
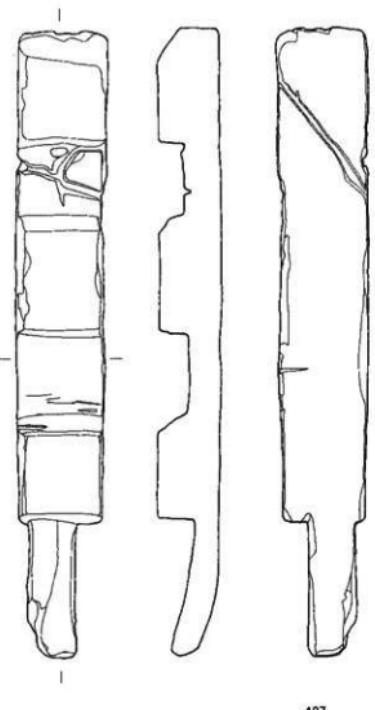
185



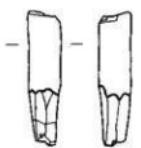
186



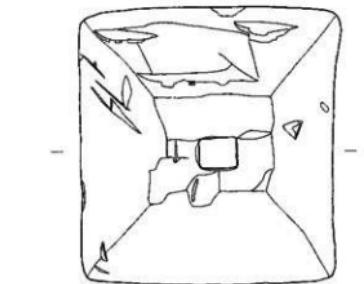
図版27 大倉N遺跡N区出土の木製品③



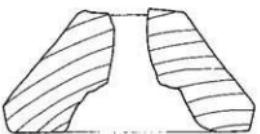
188



189

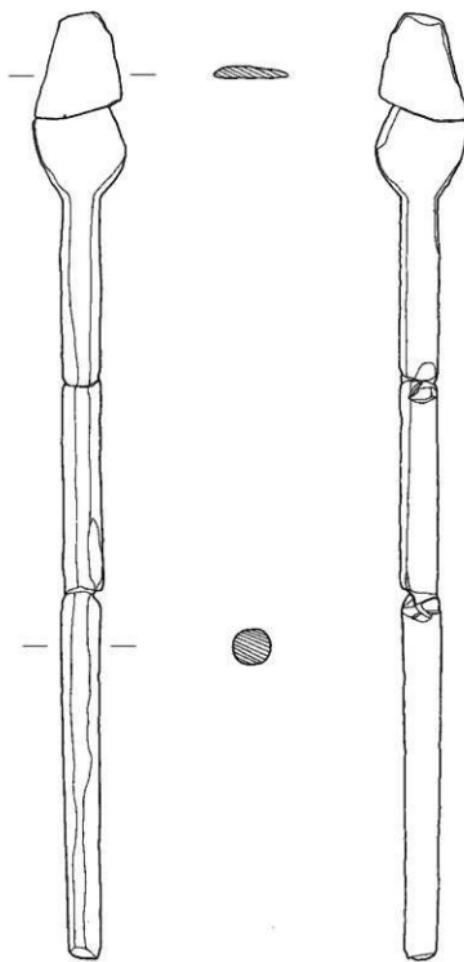


190



0 20cm

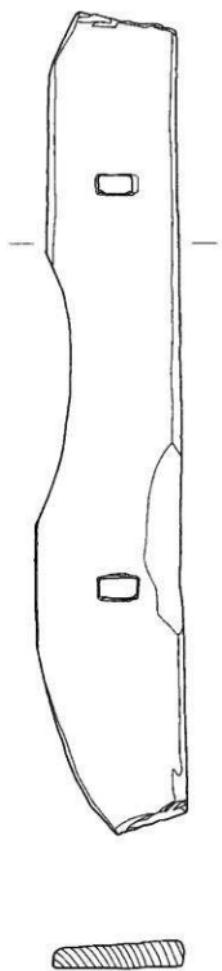
図版28 大倉N遺跡N区出土の木製品④



191

0 20cm

図版29 大倉IV遺跡IV区出土の木製品(5)



192



図版30 大倉M遺跡 I 区

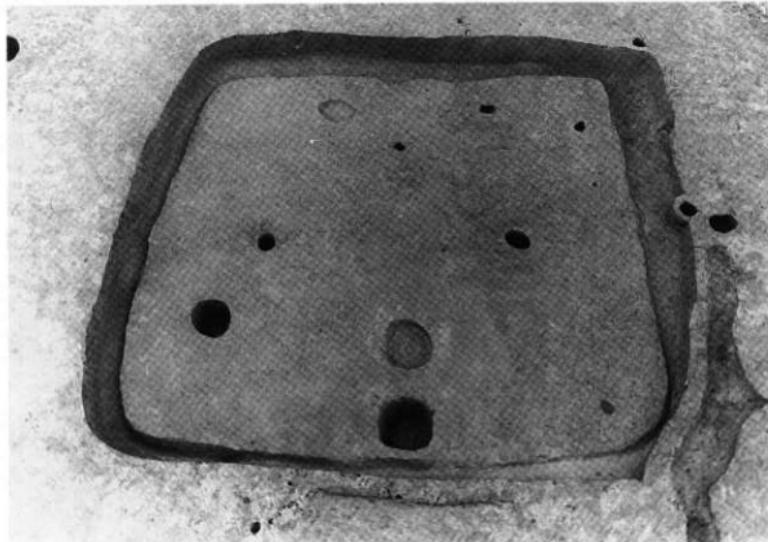


(北から)



(西から)

図版31 大倉N遺跡I区SB01・大倉N遺跡II区



I区 SB01(東から)

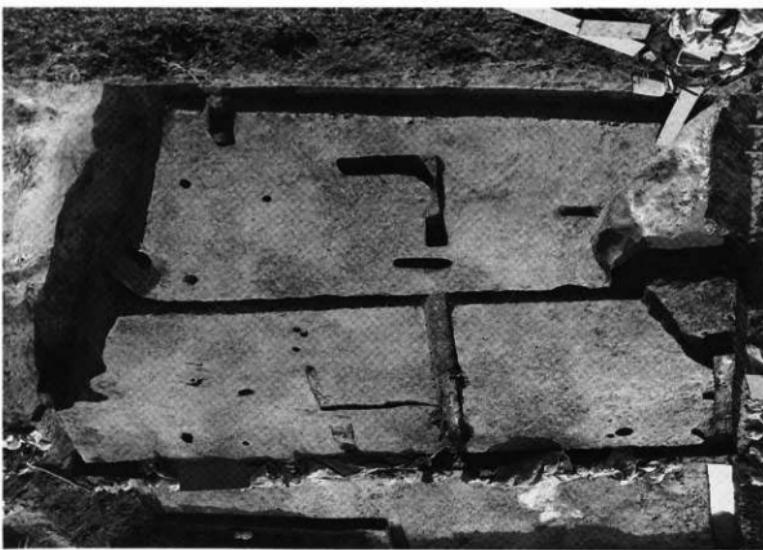


II区(西から)

図版32 大倉N遺跡Ⅲ区A地区・B地区



A地区（西から）

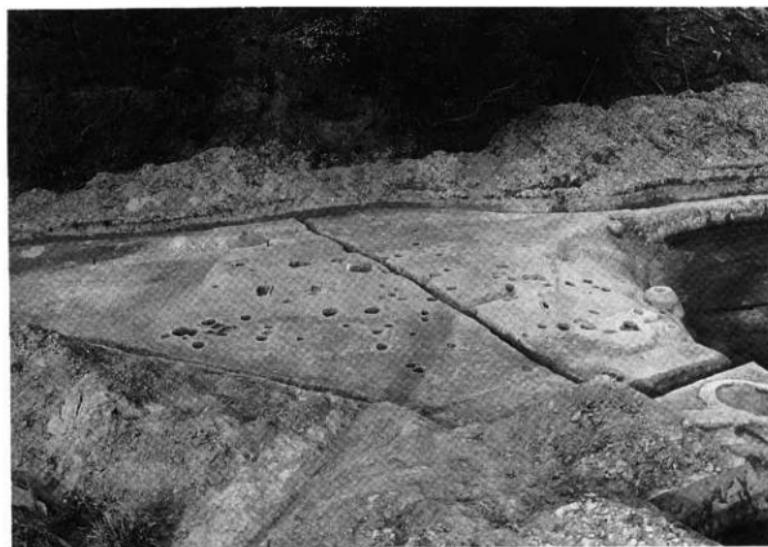


B地区（東から）

図版33 大倉N遺跡N区①

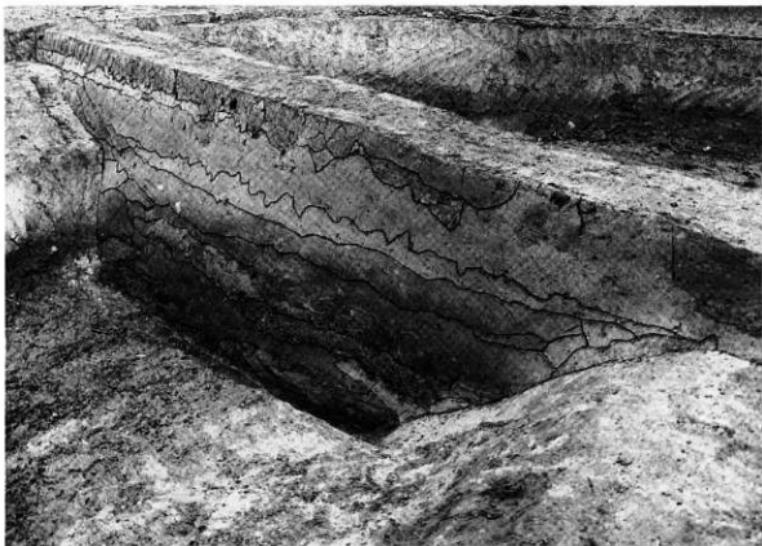


(西から)



(西から)

図版34 大倉N遺跡N区②

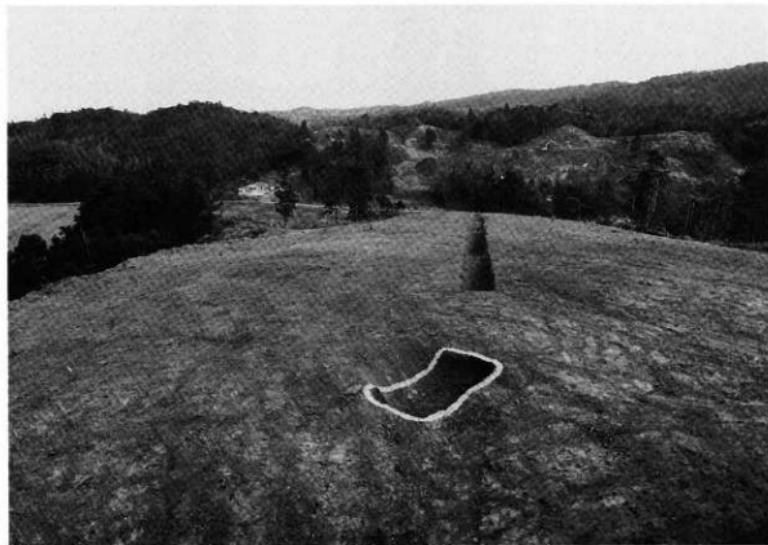


谷地形断面（西から）



谷地形断面（西から）

図版35 織田原I遺跡I区①



(西から)

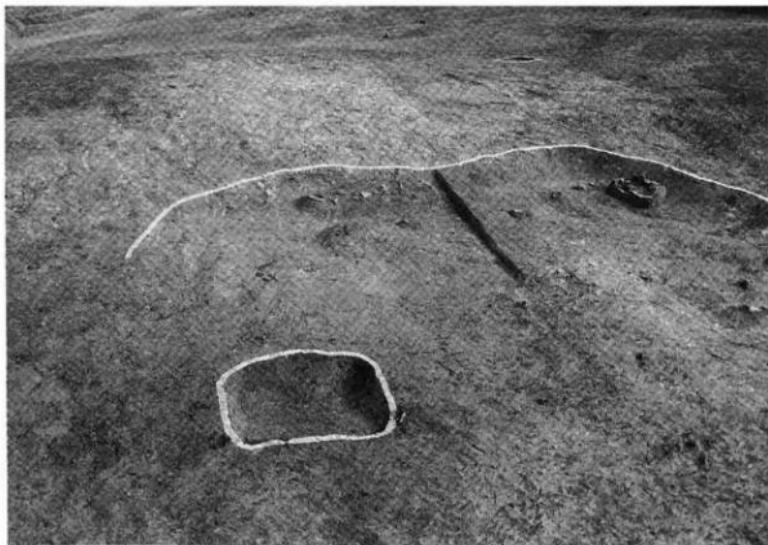


(北から)

図版36 織田原I遺跡I区②

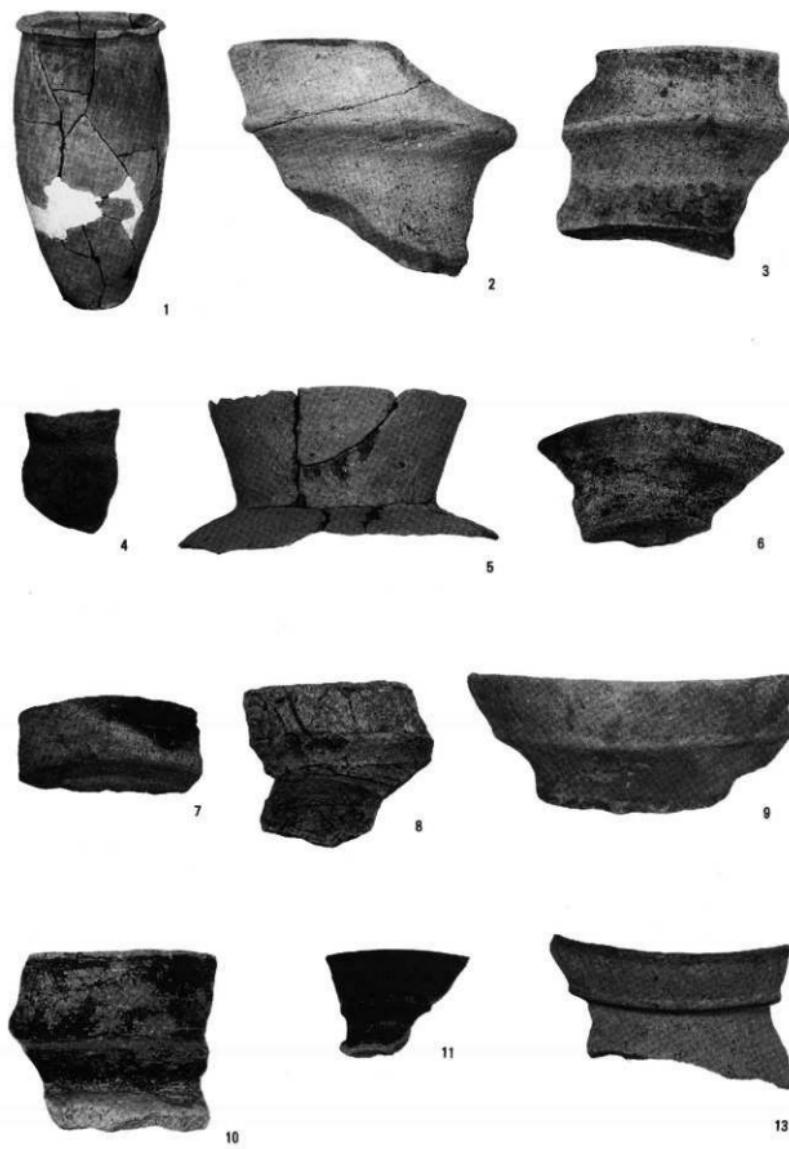


(東から)



(北西から)

図版37 大倉N遺跡I区出土の土器①



図版38 大倉N遺跡I区出土の土器②



14



15



16



17

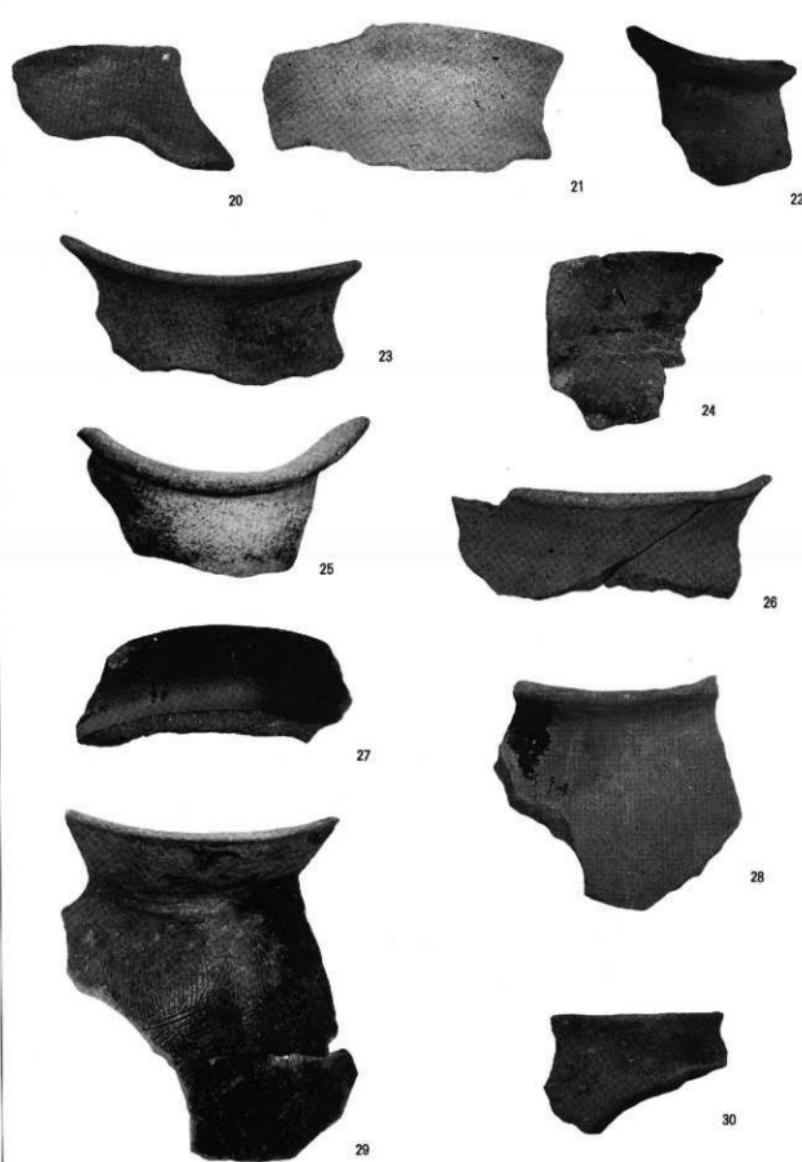


18

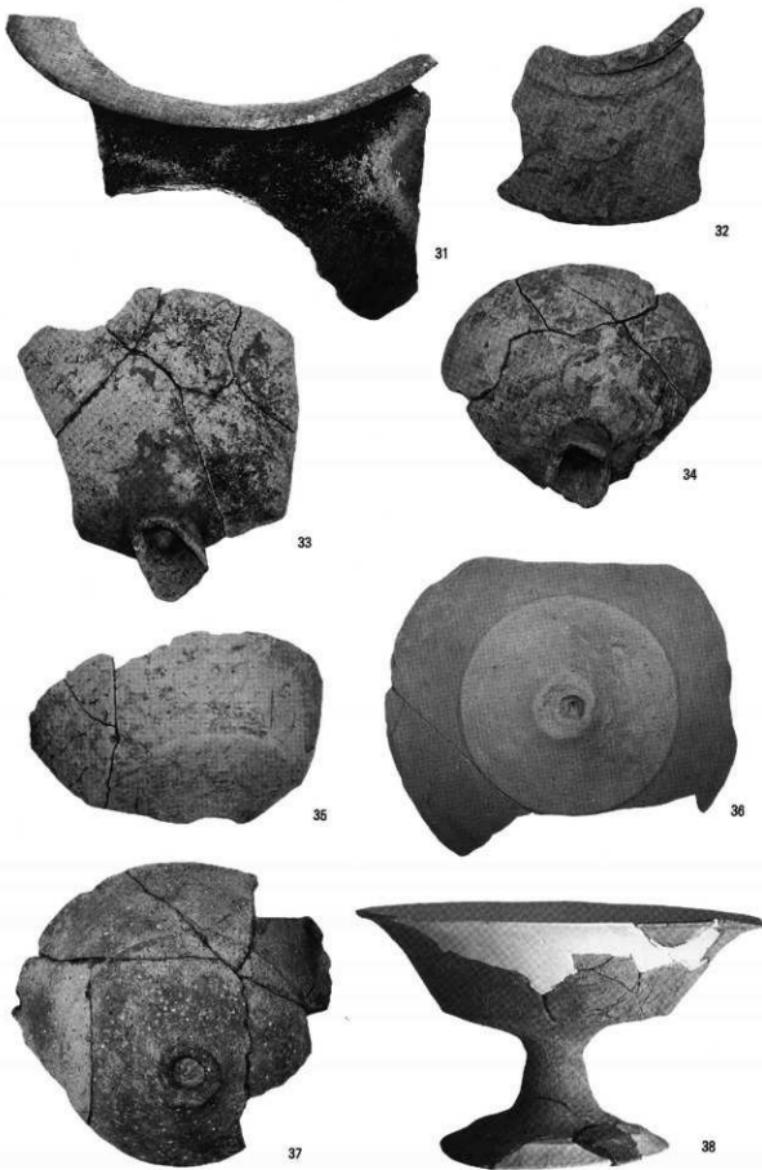


19

図版39 大倉N遺跡I区出土の土器③



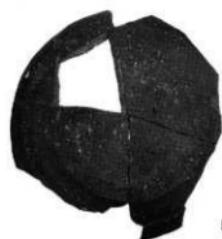
図版40 大倉N遺跡I区出土の土器④



図版41 大倉N遺跡I区出土の土器(5)



図版42 大倉N遺跡I区出土の土器⑥



50



51



52



53



54



55



56



57



58

図版43 大倉N遺跡I区出土の土器⑦



59



60



61



62



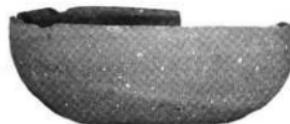
63



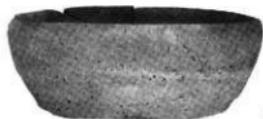
64



65



66



67



68

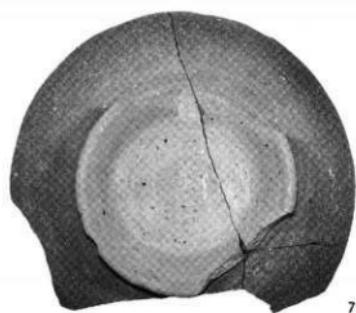


69



70

図版44 大倉N遺跡I区出土の土器⑥



71



72



73



74



75



76



77



78



79



80

図版45 大倉N遺跡I区出土の土器⑨



81



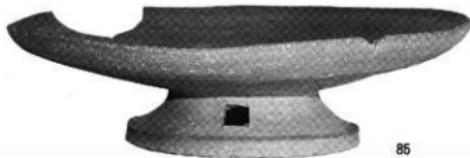
82



83



84



85

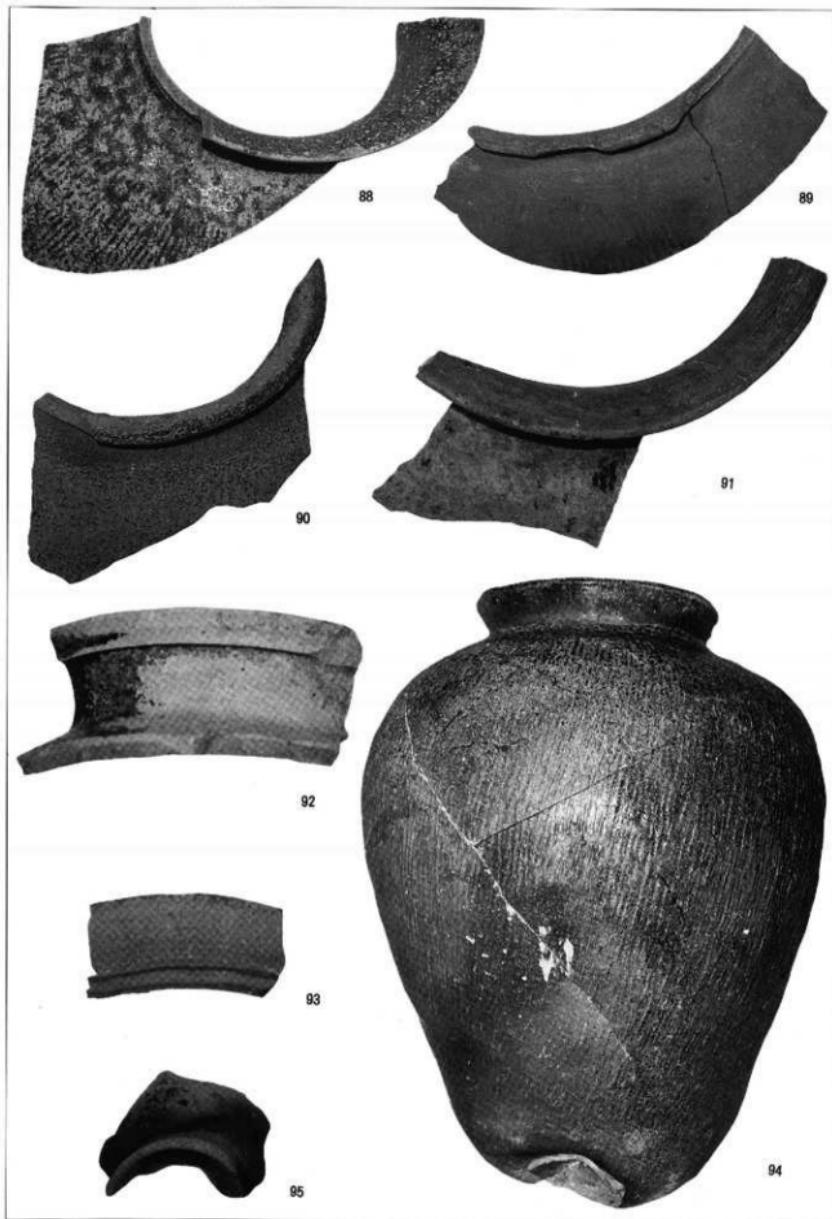


86



87

図版46 大倉N遺跡I区出土の土器⑩



図版47 大倉N遺跡I区出土の土製品・石製品・鉄製品



96



97



98



99



100



101



102



103



105



104



106



107



108

図版48 大倉N遺跡I区出土の木製品



109



110



111



112

図版49 大倉N遺跡II区出土の土器・鉄製品



113



114



115



116



117



118



119



120



121



122



123



124



125



126



127

図版50 大倉IV遺跡Ⅲ区出土の土器①



128



129



131



132



130



134



133



135



136

図版51 大倉N遺跡Ⅲ区出土の土器②



137



138

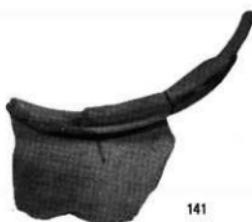
図版52 大倉N遺跡N区出土の土器①



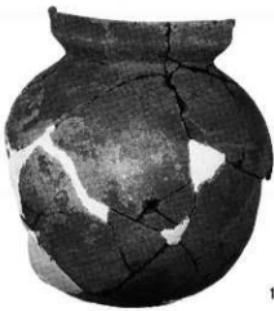
139



140



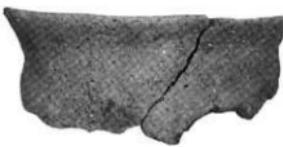
141



142



143



144



145



146

図版53 大倉N遺跡N区出土の土器②



147



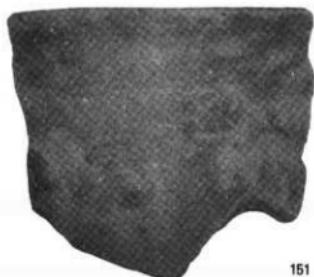
148



149



150



151



152



153



154



155

図版54 大倉N遺跡N区出土の土器③



156



157



158



160



159



161

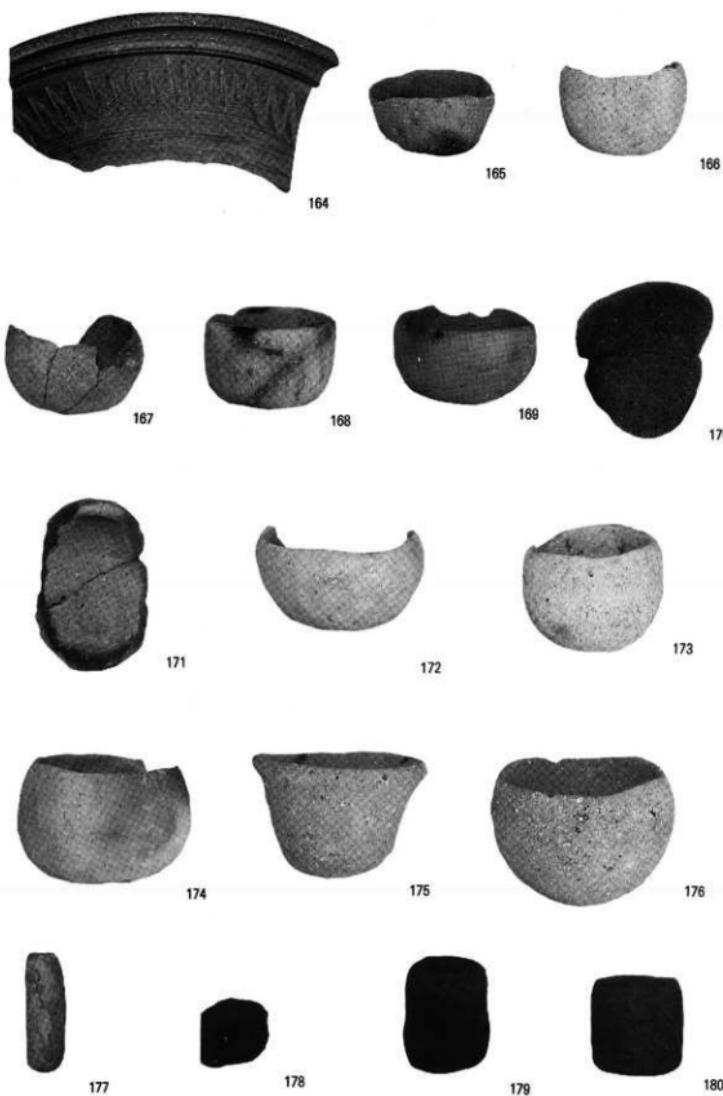


162



163

図版55 大倉N遺跡N区出土の土器④・土製品



図版56 大倉N遺跡N区出土の鉄製品・木製品①



181



184



186



185

図版57 大倉N遺跡N区出土の木製品②



図版58 大倉N遺跡N区出土の木製品③



187



188



189



190

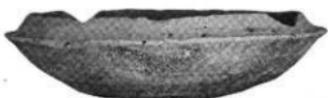
図版59 締田原I遺跡I区出土の土器



226



227



228



229

報告書抄録

ふりがな	いすもくうこう くらぶけんかつよていもいせいぞうぶんあざいはくつちゅうおほこじょ おおばら いせき わたたばら いせき
書名	佛出雲空港カントリー俱楽部建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 大倉IV遺跡・綿田原I遺跡
副書名	――
卷次	――
シリーズ名	斐川町文化財調査報告
シリーズ番号	第19集
編著者名	四方田一己・松本堅吾・川吉謙二
編集機関	斐川町教育委員会
所在地	〒699-05 島根県斐川郡斐川町大字庄原町2172番地
発行年月日	西暦 1997年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北 緯	東 経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
			131					
おお くら いせき 大倉 IV 遺跡	しまねけん おかわらんのかわらとう 島根県斐川郡斐川町 おおあがくとう 大字学頭	32401		35度 23分 00秒	132度 52分 00秒	940405～ 960331	5200m ²	ゴルフ場建設
わたた ばら いせき 綿田原 I 遺跡	しまねけん おわたばらんのかわらとう 島根県斐川郡斐川町 わたばらくとう 大字学頭	32401		35度 23分 00秒	132度 51分 54秒	950106～ 950228	3800m ²	ゴルフ場建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大倉 IV 遺跡	集落	古墳・奈良・平安	竪穴住居 掘立柱建物 溝状造構など	土師器・須恵器・土 御賀土器・石礫・鉄 釘・木製品など	
綿田原 I 遺跡	散布地	古墳・奈良・平安	土坑 段状造構など	土師器・須恵器など	

勝出雲空港カントリー俱楽部建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書

大倉N遺跡・綿田原I遺跡

1997年

発行 斐川町教育委員会

島根県簸川郡斐川町莊原2172

印刷 株式公社 報光社

島根県平田市平田町993